帝国主義の腐朽性に抗し
共同反革命を蜂起-内戦へ！
共産主義者同盟（戦旗派）

戦旗

5月5日
5日、20日発行
356号
編集発行人　鹿島　猛
1部　50円

戦旗社
東京都新宿区番衆町10の8
コーポハピービルE1号
電話 03（356）2982
振替 東京26110

5.15沖縄海洋博-皇太子訪沖粉砕へ

インドシナ革命戦争勝利万歳！

闘うアジア人民に学び、安保-日「韓」体制打倒へ！

全国の同志友人諸君！労働者人民諸君！

四・一七ブノンペン解放と、チューをサイゴンに追いつめたインドシナ人民の破竹の進撃、激化する弾圧に屈せず闘い抜く韓国民衆の血叫びをうけとめ、「三・一金芝河アピールに応え、安保-日「韓」体制打倒！」を相言葉に、四・一九闘争は戦闘的に打ち抜かれた。帝国主義＝カイライの相次ぐ敗退、今や被抑圧民族人民の総決起、大反撃が開始されたのだ。歴史の大車輪がこれまで抑圧・搾取・じゅうりんされてきた人民の力で激動を開始したのである。何ものもこれを押しとどめることはできない。これに呼応し、血債にかけて日帝の侵略反革命（戦争）を蜂起・内戦に転化し、アジア人民との闘う団結をより強固に打ち固めることが今こそ問われている。七五年の激闘を、安保-日「韓」体制打倒、海洋博粉砕・沖縄解放、天皇訪米絶対阻止の下に闘い抜き、更なる前進をかち取れ！五・一五を突破口に海洋博粉砕へ進撃せよ！

日韓共同戦線への地歩を固めた四・一九闘争

圧倒的に闘い抜かれた四・一九闘争の第一の意義は、三・一金芝河アピールに応え、日韓人民の闘う団結、日韓共同戦線形成への地歩を固めたことである。

一昨年十・二ソウル大生決起以降培われて来た日韓の闘う連帯は、昨年十一月フォード来日-訪「韓」に対する日本人民の十六万厳戒体制突破の実力闘争、韓国民衆の米大使館突入闘争などを通じて強化されて来た。反独裁日韓共同戦線を提案した金芝河氏の三・一アピールは、これをより意識的なものとし、日帝＝朴体制を打倒すべく意義深き五十六年目の三月一日に発せられたのである。

六〇年四・一九の戦士であり、一貫して韓国民衆の闘いの先頭に立って来た金芝河氏は「不倶戴天の敵」という日韓関係を韓国民衆のより強力な自己肯定を通じた闘いと、日本人民の徹底した自己否定＝猛省を通じた共同闘争によって清算すべきことを訴えている。これは全韓国民衆の血叫びであり、日本人民への真の連帯に向けた呼びかけである。「三十六年間の韓国侵略より、もっとこうかつで野獣的な方法で」韓国民衆を「生存を脅かし人権をじゅうりんし、再び地球より追放しようとしている」日帝に対し日本人民が五十六年前と同じ態度をとるのか、それとも敢然決起、韓国民衆と連帯し、安保-日「韓」体制打倒に向けて身命をささげて闘うのかを問うているのである。四・一九闘争はまさにその第一歩として戦い取られたのだ。

日帝＝朴は、日韓共同戦線への意識的前進と、「第二の四・一九」に向け、李打倒十五周年に向けての相次ぐ学生決起、投石戦、籠城、機動隊との激突、労働運動の昂揚に対し、三・一三金芝河氏再逮捕、三・一九「国家冒瀆罪」のデッチ上げ、更に、四・八緊急措置第七号発動、「人民革命党」事件被告八名のみせしめ虐殺を行い、デモを取りしまる「安保阻害行為防止法」、数万人を予防検束しようという「社会保安に関する法律」を立法化せんとしている。日帝はこうした一連の弾圧や虐殺の背後操縦を行ってきた。即ち、昨年十月二十五日三百億余円の借款を取り決めたのに続き、早川・太刀川の釈放を媒介にして日韓閣僚会議開催を表明した日帝は、四・一日韓外相会談→四・七～八日韓実務者会議で二三四億円の借款を取り決め、危機にあえぐ朴政権へのテコ入れ、全韓国の「馬山」化攻撃を進めてきたのである。そして六月には二年ぶりに第八回日韓定期閣僚会議を開き、六五年日韓条約と共に、無償三億ドル、有償二億ドル、商業借款三億ドル以上を取り決め

ダナン市民と交歓する解放軍兵士（三・二一）

た協定が切れるのにともない、韓国に対する経済的政治的支配をより一層強めようとしているのである。

だが体制的危機を韓国・東南アジアへの侵略反革命によってのりきらんとする日帝は、朴をカイライとして韓国民衆を弾圧しているだけではない。

日本国内において再三再四廃案に追いやられた入管法の先取り、椎名密約の法制化、在日朝鮮人-韓国人への弾圧を実に陰湿なやり方で強めようとしているのだ。行政の簡素化を名目とした「外国人登録法の一部改正」案は、①外国人登録人口中に占める在日中朝人民の比率を高め、②市町村で保管している登録原票の記載事項についての調査・確認義務を一層強め、日帝の差別・分断攻撃の下で職業を不安定にしておきながら、現在実際上あまり行われていない転職の十四日以内登録を明記するなど、日常的監視を強めようとしている。③外国人登録証の在留資格・期間の変更記入を入管に一元化して入管による管理を強化、④再入国許可の期限内に日本国内に帰っていない場合登録証は自動失効する、具体的にいえば、在日韓国人が祖国で朴によって拘禁されたら再入国は困難になるというものだ。これはまさしく「韓国政府の転覆を意図する犯罪行為を取締る」「放置できない」とした昨年九月の椎名密約の法制化にほかならない。

四・一九闘争は、金芝河アピールに応え、「日本国内の韓国人に対する抑圧と韓国内の日本人による搾取」、外録法改悪、一・一六体制下の同化・追放攻撃と対決し、全韓国の「馬山」化を策す日韓閣僚会議を断固粉砕すべく、日帝＝朴による弾圧の嵐に対する満こうの怒りをもって闘い、安保-日「韓」体制打倒の方向をより一層鮮明にした。とりわけ総括集会で、日韓定期閣僚会議粉砕を全人民の血債的課題として闘い抜くことを固く意志統一したのである。

第二に、四・一九闘争は安保-日「韓」体制強化の軸である十月天皇訪米絶対阻止の第一波であったことが確認されなくてはならない。

日本帝国主義は、アジア人民の総反撃、日本労働者階級人民の力の拡大、プレトン・ウッズ体制の崩壊、アラブ「石油戦略」等による体制的危機を安保-日「韓」体制の強化を通じた侵略反革命戦争と、国内での権力・社会再編、帝国主義天皇制攻撃による侵略反革命体制によってのりきらんとしている。国会＝議会制民主々義の更なる空洞化と行政・司法権力の肥大化、官僚的・警察的・軍事的権力への転成をはかり、部落大衆、沖縄人、在日中朝人民への差別・分断攻撃、破防法や国民総背番号制による治安弾圧と国民総動員への企図の中で、日の丸・君が代や靖国法案などの天皇制イデオロギー攻撃がなされているのである。それは戦前天皇制への復帰などではなく、民間ファシストをも利用しながら労働者階級を粉砕し、国益国防の下に国民を統合し、延命せんとする日帝のあがきなのだ。

日本人民は天皇の名の下にアジア人民を虐殺、抑圧、収奪した歴史的血債にかけても現下の帝国主義天皇制攻撃を断手粉砕しなければならない。十・一天皇訪米絶対阻止へとのぼりつめる七五年の激闘が開始されたのだ。

第三に激動する階級情勢の中で新たにまき起りつつある政治的活性化を更に促進し、昨秋フォード阻止実力闘争の意義をひきつぎ、その中から登場した戦闘的労働者を多数結集して闘われたことである。ベトナム・カンボジア人民の勝利的進撃、韓国民衆の不屈の反朴反日闘争に鼓舞され激励されながら、まさにベトナム・朝鮮人民のように闘おうという青年労働者がますます多く生み出されている。このような労働者が、三・一金芝河アピールに応えるべく檜町公園に結集し、外務省に対する抗議闘争を機動隊の弾圧をはねのけて貫徹した。旧沖共闘系の破産的事態、烽火・叛旗などブント系諸派の分解の中で、わが赤ヘル部隊はこれらの戦闘的青年労働者の結集を克ち取り四・一九闘争を戦闘的に牽引しぬいたのである。

ところで、かってわが戦旗派に対し「血債猛省とは何だ」という暴言をはき、学習・啓蒙運動と中傷し、更に「背後襲撃とは最前線で闘っている者のみがいえる言葉なのですよ」などといっていた足立商会派はいったいこの日何をやっていたのだろうか。立教大での映画・講演集会、即ち彼らいう所の「学習・啓蒙運動」にほかならず、結集した大衆から、「四・一九をなぜ闘わないのか」と批判される始末だったのである。そもそも足立派は最前線で闘ったことがあったろうか。狭山九月決戦の時、彼らはどこで何をやっていたのか。十一・一八では権力と闘わず、われわれへの背後襲撃を行い、沖縄闘争においても分裂と破壊策動をくりかえし、戦旗派への敵対以外は何もせず、階級闘争の前進ではなく腐敗と堕落のみをふりまいてきた者たち、それが足立商会派なのだ。

ベトナム・カンボジア・韓国の階級的激動と日本における戦闘的労働者の激流の中でまさに木屑となって消えるだろうことは今や誰の目にも明らかとなっているのだ。

ベトナム人民の戦闘精神で日本階級闘争の戦略的前進をかち取れ！

四・一九闘争の第四の意義は、ベトナム・カンボジア人民の大攻勢、破竹の進撃と勝利帝国主義＝カイライの相次ぐ敗退の中で、その闘魂、戦闘精神をわがものとすべく闘われたことである。

ベトナム・カンボジア人民は、四月一日、ロン・ノルを打倒、十七日ブノンペンを解放し、二十一日にはついにチューを打倒した。インドシナにおける反共の砦、アメリカ帝国主義のカイライが打倒され、反革命戦略が根底からくつがえされたのである。

アメ帝海外援助の半分近くを投入し、のべ六〇〇万の米軍、一五〇〇万トンの砲爆弾、数十万トンの化学毒薬をもって文字通りのジェノサイド（みな殺し）を行おうとしたアメリカ帝国主義は、なすすべもなくインドシナから追い出されつつある。インフレ・不況・資源問題をかかえた米帝は、三月には失業率八・七パーセント、八百万人と、四一年以来の失業者を生み出し、また経済成長率マイナス一〇パーセントと予想され、打開の展望を見いだしえず、他方キッシンジャーによる中東和平工作も失敗した。かつて全能を誇示した大国アメリカは今や手も足も出ないのだ。チュー、ロン・ノルの無能を非難し、「とてつもない米帝の悲劇」を嘆き、ベトナムからの人さらい作戦という恥ずべき犯罪にまで追いつめられたのである。

全ての闘う労働者人民諸君！われわれはここで次のことをはっきりと確認しておかなくてはならない。帝国主義者やブルジョア言論界に氾濫する、解放勢力の勝利についての論評は、まさに彼らの願望と自己合理化にすぎないのである。「北は南の進撃に驚いている、手綱をひきしめている」とか、これは偶然のたまものだ、この辺で攻勢も終わるだろうという見方が流されていた。しかし、チューの撤退作戦は失敗だった、指揮がまずかった、などということ自体そもそも不可能だったのだ。

大攻勢の開始ともいうべき三月十一日のダルラク省都バンメトート解放は、かつて米軍特殊部隊に訓練された山岳民族部隊の支援をうけて行われた。この構図は以後一貫して続く。ダナン解放の際、空港官制塔はカイライ軍反乱兵にのっとられ、また多数のカイライ軍兵士が武器をもって投降、人民解放軍に加わった。カイライ軍はこうして次々と瓦解し解放軍は人民の歓呼に迎えられながらサイゴンへ向って破竹の進撃、同時にチュー一派の分解を促進しながら、サイゴン内のチュー打倒勢力をつき動かし、完全勝利を克ち取りつつある。かつてありとあらゆる近代兵器を使い物量に頼ってきた米帝＝カイライ共は、今や竹矢来とタコツボに逃げこみ、一方人民解放軍は、米軍の武器をも含めてより大胆重厚な戦術を駆使している。この逆転は決して偶然の産物なのではない。

フランス帝国主義の植民地支配に対する闘いに始まり、日本帝国主義に対する四五年八月革命の成功、再び支配せんとしたフランス帝国主義に対する抵抗闘争とディエンビエンフーの勝利、だが休む間もなく史上最強を誇るアメリカ帝国主義・カイライ軍との民族解放＝革命戦争と、実に数十年にわたる苦難にみちた闘いが今漸く勝利せんとしているのだ。この中で培われた不とう不屈の戦闘精神、人民の団結を基礎としてあらゆる困難に打ち克ち、敵から武器を奪ってそれで武装し、革命の勝利・民族解放のため「北で生まれて南で

四・一九日韓労働者連帯総決起集会を貫徹！（檜町公園）

死ぬ」ことをいいとわず果敢に闘う人民兵士に誰が打ち勝つことができようか。敵を孤立化させ、ありとあらゆる勢力を革命に動員し、人民の魂に訴える革命をくいとめることはできないのだ。

七三年和平協定以来の満を持した闘い、総反攻の前に耐えきれず、チューは撤退を始め腐敗せる軍隊の五角形、逃亡へと転落していったのである。

われわれは、このベトナム人民の闘争、戦闘精神に学び、わがものとして日本階級闘争の戦略的前進のために身命を賭して奮闘しなければならない。ベトナム革命戦争の勝利に続け！　これがわれわれの合言葉である。

アジア人民と連帯し安保ー日「韓」体制を打倒せよ！

チュー、ロン・ノルの打倒、溝介石の死、まさに米帝の世界反革命戦略の担い手が次から次へと崩壊した。かつて朝鮮を跨め、人民の虐殺・収奪・抑圧をほしいままにしてきた帝国主義は、今人民の憤怒の中で撃沈されようとしているのである。抑圧されて、搾取されじゅうりんされてきた人民が必死の苦闘を通じてこれを逆転させ、解放をかち取りつつあるのだ。最早何物をもってしてもこの歴史の激動を押しとどめることはできない。四・一九革命を圧殺し、朝鮮人民の南北統一という悲願を押し潰し、日米帝のカイライとなった朴もまた例外ではありえない。韓国民衆の不屈の反対反日（帝）闘争は必ず勝利する。そしてわれわれは、この韓国民衆の血叫びに応え、安保ー日「韓」体制打倒に敢然決起しなければならない。

ベトナム・朝鮮人民の決死的戦闘によって危地に立つ日本帝国主義は、四月十日のフォード演説、十一日の宮沢・キッシンジャー会談などを通じ、反革命戦略の手直しを目論んでいる。

フォードは反共ラインをインドシナから後退させながら、「日米安保は広大なアジア・太平洋地域の安定維持の礎石」とし、また「アジアでカギを握る国は日本だが、韓国との相互防衛関係も同様に重要だ」として、日米「韓」反革命体制の打ち固めを明らかにした。更に宮沢ー キッシンジャー会談において、総決起して帝国主義と日米安保の相互防衛義務を再確認し、とりわけ六九年共同声明中の「韓国の安全は日本の安全にとって緊要」とした「韓国条項」の実際をめぐって突っこんだ話合いがもされ、同時に在沖米海兵隊のベトナム・カンボジアにおける軍事行動も「人道」として当然のこととされたのである。

こうした中で、在「韓」米軍は、昨年六月から十二月にかけて実戦部隊四千を増強、四万二千になり、慶北道北部には中小型ミサイルを装備できる大型軍事基地を建設しようとしている。そして、二月十一日の米国防報告で、「韓国の後方支援基地」とされた在沖米軍六万一千は、陸軍は縮小されたが空軍・海兵隊については以ろ再編強化されており、「西太平洋におけるいかなる地点にも敏速に展開できるよう機動編成・強化」された海兵隊二千二百がベトナム沖に出動、ブンペン・サイゴンの米人逃亡作戦の主役を担っている。鬼南アジアや中南米で減少の傾向にある米軍が、韓国・沖縄で増強され、横須賀のミッドウェー母港化などが行われていること、更に有事の海空防衛目米共同取り決めの動き等々、日帝への肩代り、安保ー日「韓」体制の軍事的固めが急ピッチで進められているのである。

日本ー沖縄ー「韓」国を結ぶ共同反革命事体制構築の下で、日帝は「民族自決は歴史の流れ」などとインドシナ人民に媚を売りながら、ここだけは例外とし、朴政権に対する徹底したテコ入れを行い、全韓国の「馬山」化反共前線基地の打ち固めを図っている。

日本帝国主義は、その加工貿易としての特性から原材料・エネルギー資源、そして市場を不可欠のものとしており、対東南アジア貿易がまさにそうしたものとしてなされること、を通じて他帝国主義との競合、高成長をなしとげてきた。従って今後もまた、更に安い資源・労働力をアジアに求め、日本商品をアジアに売りさばくことをより強力に求めざるをえないのである。

だが日帝の侵略反革命に対するアジア人民の総反撃はすでに開始されている。アジア各国における反日不買運動、アジアにこだまする「拍頭する日本帝国主義を打倒せよ！」の声、それはますます強まり高まっている。ベトナム・カンボジアにおける民族解放＝革命戦争の勝利は、帝国主義の輪を自力で打破し、労農人民の権力を打ち立てる闘いをより一層強めていくのだ。

アジア人民の総決起に日帝と朴は深い危機意識をいだきつつ、必死の延命策動を開始している。米帝との共同反革命の下で、アジアへの侵略反革命戦争を敢行せんとしているのだ。しかしそれは、米帝がインドシナから最後的に叩き出されたように、またかつて四五年八・一五の敗北を味わされたように、アジア人民によって再び撃破されるしかないのである。ここにこそ危機の深さがあり、腐敗し爛熟しきった帝国主義に国家統一、国民の反革命統合に躍起となっているのである。

かかる帝国主義の体制的危機、労働者階級人民が打って一丸となり、総決起して帝国主義を打倒し、人民のプロレタリア国際主義的連帯を強化し、反合闘争に限定ししかも労働者階級の不況」宣伝・賃金自粛の前に屈伏していくということほど犯罪的なことがあろうか。これほどアジア人民の血叫び、不屈の解放闘争にツバをはきかけ、敵対するものがあるだろうか。

同盟、IMF・JCなどの帝国主義労働運動諸団体が、早々と「日本経済がよくなる良いのか」と、賃金自粛（実質切下げ）を表明していた。そして社民同盟は、戦一地方選へと全てを流しこみながら、「今年の春闘はどうにもならないがならない」などといって逃亡し、「平和憲法下の国会で民主的に」などと幻想をふりまいている。これと連帯せず敵線から逃亡し、労働者階級を帝国主義に屈伏させようとしているのである。それは当然にも統一地方選での敗北へとひきつがれていくのだ。

日本共産党は、統一地方選の中で「地方自治体の財政硬直化は人件費が高いため」とする帝国主義のデマ宣伝に迎合し、小ブル意識に訴え、教師聖職論に統いて自治体労働者＝「全体の奉仕者」なる日帝との主張を打ち固め、他方社会党や民同は自己弁明に汲々としていたのである。

しかし、人件費問題をめぐって問われていたのはそのようなことではない。被抑圧民族と連帯せず、本工労働者の賃上げや労働条件改善のみを闘争の課題としてきたこれまでの春闘、自治体労働運動指導部の純ブロ主義・組合主義こそが問題とされていたのである。純ブロ主義と決別し、帝国主義の腐朽性に抗し、全ての被抑圧民族と連帯し、人民諸階層の闘いを安保ー日「韓」体制打倒、日帝の侵略反革命阻止の実力闘争に集中していくこと、これこそが革命党の任務なのだ。

ベトナム人民に続き、朝鮮人民連帯・沖縄海洋博粉砕・天皇訪米絶対阻止への全人民的決起を断乎勝ち取っていかなければならないのである。

五・一五闘争に総決起し、海洋博粉砕・皇太子訪沖ー天皇訪米を絶対阻止せよ！

三・一金芝河アピール・韓国民衆の血叫びに応え、ベトナム・カンボジア革命戦争の勝利に呼応した四・一九闘争の意義をふまえ、米帝反革命戦略の手直し、安保ー日「韓」体制下で進む沖縄の日米事基地強化を打ち砕くものとして、われわれは、五・一五安保ー日「韓」体制打倒・沖縄海洋博粉砕闘争に総決起していかなければならない。

七二年五・一五沖縄「返還」以降三年、沖縄はますますアジア人民の反帝国主義・民族解放闘争に抗する日米共同反革命前線基地として、強化されようとしている。米軍基地は再編強化され、日本軍ー自衛隊が派兵されることによって「返還」とは何であったかが解明となってきている。「平和憲法下の日本への復帰」を要求した人民戦線派、返還・奪還路線の誤りもまた同様である。

六五年日韓条約締結をテコとして、韓国・東南アジアへの侵略反革命を強めてきた日帝は、それに対する抵抗を圧殺する為に自衛隊の増強を行い、侵略反革命体制の確立を推し進めようとしてきた。そして第二世界の闘い、帝国主義間の平準化等により経済的・政治的、軍事的地位の低落した米帝は、日帝と共同しての反革命軍事戦略を追求していたのである。六九年佐藤＝ニクソンの共同声明はまさにかかるものとして日米安保体制の重要性をうたい、「韓国条項」をおりこみ、更に「日本を含む極東の安全をそこなうことなく」沖縄の施政権を日本へ返還することを確認、沖縄の日米共同反革命前線基地化をはかったのだ。それに対し、われわれ人民同は、沖縄人民への全ての奪還」といった路線は、日帝への幻想をあおり五・一五返還に際して同一つ闘えず、理論的・実践的に総破産をとげたのである。

日本帝国主義からの沖縄の分離・独立、日本プロレタリアートとの結合こそが沖縄人民の闘うべき方向であり、日本人民は数百年にわたる沖縄支配の歴史を猛省しつつ、日帝による沖縄の反革命統合・自衛隊派兵に対し、血債をかけて闘い抜かなければならないのである。

われわれは、六九年安保決戦の敗北の中から、第二次アジア＝戦無派統一戦線をかち取り、七二年五・二九外務省抜入・沖縄返還協定調印阻止闘争を突破口とし、沖縄階級闘争の激流から生み出された返還粉砕の戦闘的潮流と結合し、沖縄人民との国際主義的連帯を求めて七二年返還粉砕闘争を文字通り総力を尽くしてとりわけ五・一三神田逓奪戦闘は、火炎ビン立法攻撃を受けながら、機動隊を粉砕し、おその水一滴を武装制圧し、日本「本土」における返還粉砕の火柱をあげたのである。更に、逮捕者二八名、起訴七九名、家裁送致された少年三〇名という未曾有の弾圧に屈せず、七月北熊本において自衛隊派兵阻止に決起し、沖縄での日米軍事演習粉砕闘争に結合し、最後まで堅持した。

五・一五沖縄返還粉砕闘争三周年を迎えるにあたり、まずわれわれは、五・一三戦闘を頂点とする返還粉砕、五・一五侵略反革命体制打倒の革命的意義をはっきりと確認しておかなければならない。

と同時に第二に、現下の沖縄、沖縄人民にかけられている攻撃と闘い抜くこと、とりわけ沖縄海洋博に名をかりた日米軍事基地強化、沖縄の反革命統合、皇太子訪沖に対し、沖縄人民と連帯してそれを撤去・粉砕・阻止しなければならない。

日本帝国主義は、海洋博を通して沖縄の軍事機能強化、日帝独占体による沖縄経済支配、反革命統合の総仕上げをやろうとしているのだ。

海洋博開通の道路事業六四三億円、通信事業二七〇億円、空港・港湾整備一四〇億円、あるいは原子力発電所計画などは、滑走路に転用できる六千m級の道路を初めとして軍用に転化できるものであり、沖縄の基地機能を高め、文字通り全島軍事基地化をなさんとしているのだ。

これら開通道路やCTS建設などで流れこむ大量の円は、沖縄経済を破壊し、日本「本土」以上のインフレ、生活破壊、失業の下におかれ沖縄人民は沖縄から叩き出されている。そして「本土」では大和人に対する差別と抑圧の中で低賃金で酷使されている。

このような事態の下におきながら、日帝は海洋博を最大の契機として皇太子訪沖＝帝国主義天皇制の再編強化、沖縄人の日帝への統合を最後的に完了しようとしているのだ。インドシナにおける米帝ーカイライ軍の敗退は、ますますアジア・沖縄における日本ー沖縄ー「韓」軍事体制の強化、とりわけ日本「本土」三万五千ー「韓」国四万二千を上まる在沖米軍六万二千は、まさに西太平洋の要石として強化の一途をたどり、返還以前にもまして基地公害と米兵犯罪等による沖縄人民の苦渋は深まっている。

最近だけでも、四月一日には嘉手納ガソリンプシュームーブにおける海兵隊の演習により住民が負傷し、二日には金武村演習場で山火事が発生、四日まで燃え続けた（米軍領事シルベスター）は「米軍基地反対者が蟻き起した」との暴言をはいている。更に十九日には米兵による女子中学生への暴行が行われる等々、相次いでいる。

勿論、沖縄人民はこれに対して甘んじてきたわけではない。米軍基地撤去闘争、コザ人民決起などの革命的伝統をもつ沖縄人民は、体制打倒闘争の前進にふまえ、南北統一革命へと進撃している。金芝河アピールに応え、全国の同志・友人諸君！

全てのアジア人民の革命的死闘に全てを尽くして応えぬけ！　五・一五総決起に結集し、安保ー日「韓」体制打倒闘争を、四・一九に統く天皇訪米絶対阻止第二波として打ち抜かなければならない。

日帝は、帝国主義再編を通じた国民の反革命統合に総力を注いでいる。安保ー日「韓」体制打倒闘争を、四・一九に統く天皇訪米絶対阻止第二波として打ち抜かなければならない。

第三にわれわれは、五・一五安保ー日「韓」体制打倒闘争を、四・一九に統く天皇訪米絶対阻止の巨大な水路を切り開け！

百人の阻止団が全武危山中に入りこみ、米軍ヘリ出動・警察機動隊弾圧・排除策動を打ち破って、ゲリラ的に着弾地点を占拠、演習阻止に追いこんでいる。またCTS建設阻止闘争も日共の分裂破壊策動に抗して前進しているのである。

こうした沖縄における闘いと共に、「日本「本土」における沖縄人への差別・抑圧に対する闘いもまた、戦闘的な日本労働者人民との連帯・団結を克ち取りつつ着実に前進している。われわれは、沖縄人民の決起に応え、大和排外主義・純プロ主義、足立商会派の如きエセ左翼の敵対を打ち砕き日米軍事基地撤去・皇太子訪沖絶対阻止・海洋博粉砕を総力を挙げて戦い取らなければならない。

第三にわれわれは、五・一五安保ー日「韓」体制打倒闘争を、四・一九に統く天皇訪米絶対阻止第二波として打ち抜かなければならない。

日帝は、帝国主義再編を通じた国民の反革命統合に総力を注いでいる。安保ー日「韓」体制打倒闘争を、四・一九に統く天皇訪米絶対阻止第二波として打ち抜かなければならない。

日帝は、帝国主義再編を通じた国民の反革命統合に総力を注いでいる。安保ー日「韓」体制打倒闘争を、四・一九に統く天皇訪米絶対阻止第二波として打ち抜かなければならない。

金芝河アピールに応え
安保ー日「韓」体制打倒へ総決起！
4・19

労共闘四〇〇、天皇訪米阻止の第一波打ち抜く

四・一九日韓労働者連帯総決起集会は、檜町公園に東京をはじめとして神奈川、埼玉等の首都圏の労働者、学生、高校生二〇〇名の結集のもと、戦闘的に打ちとられた。

この集会は、三・一金芝河アピールに応え抜くものとして、日朝人民の国際主義的連帯の闘いとして打ち抜かれたものであり、安保ー日「韓」体制と徹底対決し、その焦点ともいえる今秋天皇訪米絶対阻止の大爆発への巨大な前進をかちとってゆくための闘いに応えて安保ー日「韓」体制打倒へ総決起せよ！

沖縄の反革命統合＝海洋博粉砕！

日米軍事基地撤去、CTS建設阻止！

天皇訪米ー皇太子訪沖絶対阻止！

五・一五侵略反革命体制粉砕！

沖縄解放・安保ー日「韓」体制打倒！

主観的闘いの意義を確実にわがものとし、日帝のアジア侵略反革命を決して許さない、被抑圧人民と連帯した革命勢力を強固につくり出し、安保ー日「韓」体制を爆砕していかねばならない。

当日、金芝河の革命的呼びかけに応え、韓国民衆の不屈の民衆闘争に連帯する闘いを、日帝の韓国への侵略反革命阻止＝安保ー日「韓」体制打倒の一大決起として実現することを意思一致した労共闘四〇〇の部隊は、この前段に独自の集会を貫徹し、この日の韓国連帯の闘いにずくずくと結集していく労働者の闘いに応えて安保ー日「韓」

体制を打倒しなければならないことを鮮明に訴えた。

この訴えは、多くの戦闘的労働者の共感を呼び、「金芝河のアピールに応えて闘う」「安保ー日『韓』体制を打倒する」という革命的気運が高まっていったのである。

統一集会は、そのような熱気あふれる中で開催されていった。

司会の挨拶ののち、決意表明に立った各団体の代表は、埼労活連、東京各地区、神労活連をはじめとして全員、「日韓連帯ーアジア人民と連帯して闘う」「韓国民衆に闘う意志を示す」固い決意を明らかにし、この日の闘いを安保ー日「韓」体制と対決した、国際主義的闘いとして闘うことを明らかにした。

続いて、この集会に寄せられた三つのアピールが紹介されたが、その中で「朴ー岡本による『人民革命党』事件での八人の虐殺を糾弾する。韓日両国民は人類共通の敵朴をぼくめつしなければならない。金芝河を支持し、第八回日韓閣僚会議を粉砕しよう」との熱烈なアピールには、参加者全員が圧倒的拍手で応え、安保ー日「韓」体制打倒の決意がみなぎった。

その中で発言に立った労共闘の同志は、「韓国民衆が必死で反対しているものに反対し、韓国民衆の守ろうとしているものを守り抜くことを固く決意し、安保ー日『韓』体制の強化と対決しなければならない。日韓閣僚会議ー天皇訪米を、労働者人民は三十六年間の朝鮮植民地支配を猛省する中で、血債にかけて阻止しなければならない」と力強く訴え、参加者の圧倒的拍手で確認されていった。

その後デモに出発した一二〇〇の戦闘的労働者は、日比谷公園までデモを行っていったが、労共闘の部隊は、金芝河のアピールに応えるべくみなぎる決意で終始戦闘的デモンストレーションを貫徹し、韓国民衆の闘いに連帯すべく断固として闘い抜いたのである。

四・一九闘争をひきつぎ日韓閣僚会議を粉砕せよ

全国の戦闘的労働者、学生、高校生諸君！

三・一金芝河アピールに断固応え、ベトナム・カンボジア人民の解放闘争の勝利に呼応して、日韓人民の闘う団結をかちとったこの四・一九集会は、日帝の侵略反革命政策の環と言える、安保ー日「韓」体制の強化、打ち固めである、日韓定期閣僚会議、天皇訪米絶対阻止への第一波として、戦闘的に闘い取られた。

金芝河のアピールにもあったように、まさに三十六年間の朝鮮人民抑圧の歴史的血債にかけ、日帝ー朴の反革命的・暴力的人民抑圧策動に徹底対決する、天もつく決意を打ち固め、天皇訪米阻止の固い戦闘的前進をかちとっていかなければならない。

そして更に、昨秋フォード阻止の闘いに戦闘的に決起した多くの労働者、学生、高校生との固い団結・連帯をも、安保ー日「韓」体制爆砕の闘いの中で実現していく必要がある。

カンボジア解放につづき、今また反革命カイライ政権の支配の下に押えつけられてきたベトナムの解放の日が、刻一刻と近づき、米帝は文字通りインドシナからたたき出されてしまった。もはや、いかなる反革命的策動、まきかえしをもってしても、インドシナ人民の、そして韓国民衆の正義の闘いを押し止めることができないことは、最近の勝利的激動情況をつうじ、誰の目にも明らかになっている。

今こそわれわれは、この被抑圧人民の大攻勢に呼応し、革命的なベトナム・カンボジア人民、韓国民衆と断固連帯して、日帝の侵略反革命と対決し、戦闘的労働者人民の総力をもって日帝打倒の革命的大道をまい進していかねばならない。

更に闘いを拡大し、五・一五安保ー日「韓」体制打倒、海洋博粉砕闘争へ総決起せよ！

全体集会へむけて意志統一する労共闘部隊（四・一九）

アメリカ大使館近くを行く400の労共闘部隊

4.17 安保ー日「韓」体制打倒に向け 日韓連帯集会をかちとる ―関西―

全国の戦闘的労働者、学生の皆さん！

韓国学生革命十五周年を二日後にひかえた四月十七日、「三・一金芝河アピール」に応え、日韓連帯討論集会が神戸青年学生センターに多くの戦闘的労働者、学生を結集し、かちとられました。

この集会では、四・一九闘争への総決起を確認し、安保ー日韓体制打倒の決意を打ち固めていきました。

集会では、最初に労共闘の仲間から基調が提起されました。即ち第一に、プノンペンを陥落し、サイゴンを包囲しているインドシナ人民、死を賭して朴の独裁と闘っている韓国民衆により、帝国主義者は敗北し、人民は確実に勝利していること、第二に今日、日韓両人民が真に連帯を克ち取るために三・一金芝河アピールに応えきらねばならないこと、そのために第三にわれわれは、朴カイライを支えている安保ー日「韓」体制を打倒し、人管体制を解体しなければならないこと、が明らかにされ、日帝の侵略反革命＝全韓国の「馬山」化を阻止し、六月に予定されている日韓閣僚会議を阻止し、在日朝鮮人弾圧を粉砕しなければならないことが訴えられました。

そして討論に移り、参加者全員で四・一九日韓労働者連帯集会を、「金芝河アピール」に革命的に連帯し、昨秋十一月フォード来日実力阻止闘争を継承し、安保ー日「韓」体制打倒に向け、六月日韓閣僚会議粉砕の第一歩として闘うことを確認していきました。

5.15 安保ー日韓体制打倒、沖縄海洋博粉砕闘争

時間　午後六時

五・一五安保ー日「韓」体制打倒、海洋博粉砕闘争に総決起せよ！

沖縄の反革命統合＝海洋博粉砕！

日米軍事基地撤去、CTS建設阻止！

天皇訪米ー皇太子訪沖絶対阻止！

五・一五侵略反革命体制粉砕！

沖縄解放・安保ー日「韓」体制打倒！

三・一金芝河アピール

一、五十六年前の三月一日は、われら朝鮮民族と日本民族が同じように厳しい痛みと深い人間的自覚を持って、強く記憶すべきである。この日は日本民族がわが民族を野獣のように侵略し、抑圧し、搾取したにもかかわらず、わが民族があなたがた日本民族をただ敵として復しゅうしようとせず、自己の主権と自己の独立の戦いを非暴力的、平和的運動で行うことを宣言し、そうすることによって被害者であるわが民族だけでなく、残忍無道な迫害者である日本民族までも救おうとした日である。

一、三十六年間、私達国民に対する日本国民の史上類のない恐かつ、残酷な帝国主義的侵略と抑圧と収奪は、わが民族全体をけだものに等しい地位に追い込み、ついに〝地球より追放される者たち〟におとしめた。

一、日本国民は、そのように非人道的方法でわが民族を非人間化したにもかかわらず、わが民族は自分だけでなく日本国民までも人間化し、救済しようとしている。まさにこれがわが民族と日本民族がきょう（三月一日）を必ず記憶しなければならない理由である。

一、現在、日本民族が三十六年間の非人道的韓国侵略より、もっとこうかつで野獣的な方法でわが民族の生存を脅かし、人権をじゅうりんし、再びわれわれを地球より追放しようとしている。これに対するわが民族の憤怒と憎悪は極限に達し、今後どのような形の暴力的報復が突発するかわからない深刻な状況に置かれている。馬山輸出自由地域で若い女工の労働を搾取、その女工の貞操までも無残にじゅうりんする事態、キーセンパーティーに関連したこらえることのできない無数の不快な事態を私達はどうみたらよいのか。

一、もちろんこうした誤りは、自分だけ責められるものではない。現在の朴政権の罪科も大きいことを私達ははっきり知っている。であるが故に、私たちは現政権のこのような反民族的政策に対し強く批判し、闘争してきた。

一、しかしもう一人の犯人である日本に対して、私たちはどうすればよいのか。日本人に対する私たちの憤怒と憎悪は極限に達している。この憤怒と憎悪が解消できないとすれば、その結果あなたがたと私たちは、いままた再び三十六年前と同じ非人間的で深刻な歳月を体験することは明らかである。

一、私たちとあなたがたは、何か断固とした悲壮な覚悟で努力しなければならないと思う。私たちはすでに民主、民族、民生の大原則を前提として、そういう努力を力強く行ってきたし、いまあなたがたも私たちの努力と闘争を支援した。このような韓日両国人民の進路が、私たちとあなたがたを同じように救う活路である。

一、特にあなたがたは、私達が必死に反対するものを必死に支援しようとし、私達が必死で守ろうとするものを必死にじゅうりんしようとしている。あなたがたはいま、これを逆にする勇敢な道徳的決断を下さねばならない。お互いが人間らしく生存する唯一の活路は、私達が現在進めている民主、民族、民生運動とこれに対するあなたがたのより広い、より強化された共同闘争だけである。

一、私たちはこの運動をより強力な自己肯定を通じて、自己の抑圧された価値を盛り上げる方向に進めるだろうし、あなたがたはより徹底した自己否定を通して、自己の罪悪を清算する方向に進まねばならない。これだけが私たちとあなたがたがこの地球上に生きる価値のある人間として堂々と生存できる唯一の道である。そしてまたこれだけが、私たちとあなたがたの過去のあのせい惨な不倶たい天の敵という関係を清算する道である。

一、意味深い三・一記念日を迎え、私たちはあなたがた日本民族に民主主義と自由、基本的生存権と人間らしい生のために、韓日両国の善良な国民の共同のより強い闘争を提案する次第である。

〈日本国民に対する提案〉

一、日本政府は、日本企業家たちの韓国に対する新植民地主義的経済侵略を即刻中止し、真の韓日友好協力を促進せよ。

一、韓国政府は、日本に対する卑屈な態度と無分別な借款導入をやめ、民族的尊厳と民族経済発展のための韓日経済関係を確立せよ。

一、民主回復国民会議を中心とする韓国の民主、民族、民生に対する日本国民の共闘のために韓日両国民の反独裁、共同戦線結成を提案する。

一、日本国民は、日本国内の韓国人に対する抑圧と韓国内の日本人による搾取に反対するより強力で持続的かつ広範な闘争を直ちに開始し、私の提案にこたえてほしい。

一、二人の日本人学生、早川、太刀川両氏は若干の軽卒さによって失策を犯しはしたが、基本的には善良な人であり、自分の犯した罪以上の罰を受けた人であった。私はこの機会に二人に対する同情と感謝の気持ちを表明したい。また良識ある日本の皆さんが、この二人の善良な青年を被害者として温かく迎えるよう、衷心から希望する。

一、二人の日本人学生に関していろいろ意見が出ているが、数日前、日本の新聞で評論家の松田道雄氏の見解を知った。この見解は、まさしく私がそのように願っていた良識ある日本人の正しい韓国観であった。

（松田道雄氏が金芝河氏の発言に「日本人への連帯の拒絶としてではなく、新たな連帯への呼びかけであると解したい」と論評したことを指すものとみられる）松田氏に敬意を表するとともに同氏の見解を知ることにより、私とわが民族が将来、真の韓日友好関係を開けるとの強い楽観に到達できたことを心から感謝する。また私とすべての民主人士および学生たちの救出のために労苦を惜しまなかった日本国民と日本のすべての友人に深く感謝し、韓国内外のすべての同胞に感謝、今後身命をささげて、祖国の民主主義発展のために貢献することを誓う。

過渡期世界の革命
―第三次ブントへの軌跡―
日向翔著
定価一二〇〇円　送料一一〇円
戦旗社

破産を宣告された
足立商会派の反革命襲撃路線

四月四日足立商会派はついに自己批判をした。十一・一八、二・一三、二〇、二一、二八と連続した闘う沖縄人民と革命派に対する反革命襲撃と反革命襲撃路線はわれわれの断固たる闘いによって粉砕されたのである。闘う人民に敵対するものは必ずや撃破される。不正義は正義によって、反革命は革命によって、帝国主義は被抑圧民族・人民と労働者階級人民によって必ず打倒されるのだということを足立商会派はおもい知るがよい。

現代過渡期世界における勝利の鍵は被抑圧民族・人民とこれと連帯する革命的労働者人民の手にしっかりとにぎられている。帝国主義者と反革命カイライ共、これを支援する社会排外主義者達は敗退に敗退を重ね、みじめにも絶望的な断末魔のさけびをあげ、身をよせ合ってあえいでいるのだ。

ベトナムを見よ！カンボジアを見よ！韓国を見よ！

カンボジアではカンボジア人民に追いまくられついにロン・ノルは逃亡し、反革命カイライ政権は瓦壊した。ベトナムでも事態はかわらない。ベトナム解放勢力の大攻勢によって南ベトナムのカイライ軍は北部、中部からたたき出され大部分が解体してしまった。サイゴンでミンが打倒され、全土が解放されるのも時間の問題である。

米帝国主義はもばやこれら反革命カイライ政権を支える力をもっていない。人命救助を口実とした軍事援助や軍事介入等のこそくな反革命策動を続けているが、既にロン・ノルを見捨てており、ベトナムからたたき出されるのは自明のこととなのだ。ベトナム・カンボジア人民の民族解放・革命戦争の破竹の進撃の前に米帝と反革命カイライ共は如何にあがこうとも無力であり、敗退につぐ敗退の道しかありえないのである。

韓国民衆は日帝＝朴体制の延命策であった二・一二国民投票攻撃をボイコット闘争をもって打ち砕き、国家冒とく罪、大統領緊急措置七号等の反革命弾圧、「人民革命党」事件被告八名のみせしめ虐殺にも屈することなく決死的闘いを展開している。三・一アピールを発した金芝河氏を先頭とする韓国民衆の何ものをも恐れぬ不屈の闘魂に日帝＝朴体制は真底から恐怖し、反革命の牙をむき出しにした戦争をしかけることによって、米帝とチュー、ロン・ノルがたどりつつある自滅への道をひた走っているのだ。

現代過渡期世界の趨勢は被抑圧民族・人民とこれと連帯する革命的労働者人民の勝利であり、帝国主義と反革命の敗北、これである。

足立商会派の反革命襲撃路線の破産、敗北も又歴史の流れであり、闘う人民に敵対する集団の末路なのだ。だがしかし、米日帝が敗北を敗北として認めることができず、こそくな延命策を弄していると同じく、反革命足立商会派も又自らの敗北を認めることができない。追いつめられた者の最後のあがきとして政治的のりきりを策そうとしているのである。

われわれは足立商会派の四・四自己批判が闘う沖縄人民と革命派に対する敗北宣言であるということを確認するとともに、他方において絶望的延命をかけた政治的のりきり策でもあるのだということを徹底的に暴露し、最後的延命の道をもこっぱみじんに粉砕していくのでなければならない。

足立商会派への自己批判要求貫徹

先ずは足立商会派の自己批判書をここに紹介しておこう。

自己批判書

①二月十三日I君になぐりかかり、私物を奪った事、及び二月二〇日の「かちとる会」情宣の際我々が情宣闘争に参加しようとした特定の部分と論争を行ない、かつ部分的になぐる等の行為をなし、それを川崎駅改札口付近まで追いこめる等して、当日の情宣、会議を不可能ならしめた事、更に以上の事態を契機として「かちとる会」に対して多大な混乱と運動上の停滞をもたらした事について、卒直に自己批判の意を表明したい。

②更に二月二十一日の公判に際して、我々がゼッケン、ハチマキ着用の上、マイクを使用して集会を行ない、アジテーション、シュプレヒコールを行ったことに関して、山口重光君の闘いという貴重な教訓がありながらも、それを充分に生かすことができず、獄中にあるO、U両氏との間に、支援運動に対する不信を生ぜしめる一因ともなってきていることを認め、自己批判の意を表明すると共に、今後両氏との連帯をかちとるべく一層の闘いを押し進めることをもって、自己批判の実践的貫徹とする決意を表明したい。

以上簡単であるが、我々の自己批判の意を表明する。

四月四日

沖縄差別を許さず沖縄人の連帯をかちとる会様

土方哲義　反帝戦線
美杉　司　西田派

全国の同志諸君！労働者諸君！足立商会派は十一・一八フォード闘争を闘う青年労働者、連帯して闘う青年労働者に背後襲撃をかけ、二・一三沖縄解放闘争の重要な一環であるO・U裁判闘争を闘う労働者に待ち伏せ襲撃を行い、二・二〇ー二一とO・U裁判闘争の重要な局面での分裂、敵対活動、二・二八沖解同（準）のO氏に対する反革命襲撃をもって沖縄解放闘争の爆発的発展をおし止める役割りを果してきた。日帝による海洋博＝沖縄の反革命統合攻撃の尖兵として、闘う沖縄人民、これと連帯して闘う青年労働者に対する敵対をくり返してきたのである。

われわれは足立商会派のこのような沖縄人民襲撃を糾弾し、反革命襲撃路線を粉砕すべく、闘う沖縄人民と共に断固として闘い抜いてきた。三・七自己批判要求をあくまで堅持して、居直り、逃亡しようとする足立商会派を徹底的に追いつめ、ついに四月四日自己批判をかちとった。

(1) 反革命襲撃路線は粉砕された

四・四足立自己批判の第一の意義は、彼等の沖縄人民襲撃路線、沖縄解放闘争破壊路線が基本的に破産したということである。彼等の反革命的悪業が闘う沖縄人民とわれわれによって暴露され、粉砕されたのだ。

いまや足立商会派の反革命性、反人民性は全ての闘う沖縄人民の知るところであり、フォード闘争を闘ってきた全ての労働者人民によって確認されており、だれも彼等を共闘の対象として考える者はいない。このように闘う人民の広汎な糾弾の意志が彼等を孤立させ、敗北を認めさせ、自己批判に追い込んだのである。

そもそもあの十一・一八の朝鮮人民の血叫びに応えたフォード実力闘争を肉弾をもって闘い抜いたわれわれに対する背後襲撃に正義性があるであろうか。権力と闘い数十名の被逮捕者を出し傷ついている者を、しかも権力の面前で背骨挫傷の重傷を負わせ、更に朝鮮人民に連帯し、沖縄解放・安保ー日「韓」体制打倒を闘い抜いた革命的沖縄人労働者を襲撃する足立商会派が革命的であると認められるだろうか。これを認めるのは権力のみであり、労働者階級人民は絶対に認めない。このことは日本階級闘争を闘い抜いている全ての部分が現在確認していることである。足立が頼みの綱としたっている解放派でさえかばうことはできないのである。

それでは二・一三N＝I君に対する六人での待ち伏せ襲撃、二・二〇ー二一O・U裁判闘争への反革命的敵対はどうだったろうか。沖縄解放闘争の重要な一環であるこの闘いが二・二八第一回公判闘争へと登りつめようとしている重要なこの時期に、闘いの高揚をつ

くりだすのではなく、むしろ敵対と分裂、混乱を持ち込んだのであり、闘いの爆発を恐れた権力ー裁判所の尖兵としての役割りを果したのだということはいまでは誰もが知っている常識である。

ここでも足立商会派の正義性を認める部分がいるとしたら教えてもらいたいものだ。沖縄解放闘争に決起している全ての労働者人民、諸団体が彼等の反人民性を認めている。もし足立を支持する部分がいるとしたらカクマルだけであろう。

ましてや二・二八沖解同（準）O氏に対するテロ、リンチに至っては絶対に許されるはずがない。闘う沖縄人民全ての糾弾の嵐にさらされているではないか。

このように十一・一八反革命を決定的テコとしたこの三ケ月間の足立反革命の反革命襲撃路線はことごとく闘う沖縄人民、労働者人民の反撃にあい、権力・カクマル以外には誰にも支持されることなく、完膚なきまでに粉砕されてしまった。四・四自己批判は足立商会派の敗北の書として克ちとられたのだ。闘う人民とわれわれによる断固たる闘いの成果なのだということを確認しなければならない。

(2) 絶望的延命をかけた政治的のりきり策動を許すな

四・四足立自己批判の第二の意義は追いつめられた足立商会派が絶望的延命をかけて政治的のりきりをはかろうとしていることが、はっきりと暴露されたことである。自己批判書を検討して見ればわかることだが、起った事実についてわびているに過ぎない。例えば①「I君になぐりかかり、私物を奪ったこと」②「なぐる等の行為をして：：情宜、会議を不可能ならしめた事」③「多大な混乱と運動上の停滞をもたらしたこと」等について「悪かった許してくれ」と言っているだけなのである。

しかし問題なのは①②③の行為がO・U裁判闘争にいかなる役割を果したのかについて一切不問に付しており、したがってこのような行為を引き起こした自己の政治的、思想的、組織的内実を切開することを回避していることである。これではどんなに美辞麗句をならべたてようとも、単に口先だけの自己批判であり、むしろ本質的な自己批判を回避し、政治的のりきりの為のペテン的なものでしかない。

この自己批判が絶望的延命をかけた政治的のりきり策動であり、全くもってペテン的な代物でしかないことは、これを出すに至った過程での足立反革命の頭目西田の言動にはっきりと示されている。口先だけではわが同盟からひょう窃した主張で左翼的ポーズをつくり、なんとかこの間延命してきた西田は、生きた階級闘争の中で、とりわけ血債の内実が問われる沖縄解放闘争の中で、沖縄人民に敵対せざるを得ないカクマル主義的体質が露呈してしまったので困り果ててしまった。そして驚くべきことには、沖解同分裂問題を契機に「協議離婚」したはずの解放派のところに泣きついたのである。西田いわく「何故こんな（沖縄人民へのテロ行為故の嵐のような糾弾ー自己批判要求）になってしまったのか解らない。あれは現場（襲撃隊長土方）がつっ走ってしまったのだ。」更にいわく「I（＝沖縄人活動家）は自尊心の強い男で元中核派だから引きまわされてしまった。」「今後は『かちとる会』は聖域にする。しかしそれ以外の所では徹底的にやる（＝反革命背後襲撃）。」なんとなんと！いやはやとんでもない革命家ではないか。

どんなにこの広い世界をさがしてもこれほど「すばらしい」没主体性の見本のような言葉は見つからないだろう。足立商会派が十一・一八から二・一三、二〇、二一、二八と沖縄人民を襲撃し続け、敵対に敵対を重ねたことに対する「主体的」総括がこれなのである。なんのことはない。組織として政治的、思想的切開を行い内省を深めるのではなく、又「最高」責任者としての責任を痛感するのでもなく、全てを現場＝反革命襲撃隊長土方のせいにし、自らが獲得しようとして接近した沖縄人活動家Iのせいにしてしまっているのだ。七三年六月同盟十二中委での脱落に際して「右派がパージされようとしている。不信がある。これはHやNのせいだ。」として戦旗派建設上における自らの主体的総括をH批判にすりかえていったことや、脱落した後も青婦協路線の右翼性をわれわれに批判されると、真剣に総括するのではなく大下のせいにしパージしてしまったやり方と全く同じであり、現在に至っても何ら変っていないのである。

ここに明らかなように足立商会派＝西田は何ら主体的反省をしておらず、それだけでなく、「今後は『かちとる会』は聖域にする」なる全く技術的な提起をもって沖解同やわれわれに対するボス交の道をさえ追求することによって政治的のりきりをはかろうとしたのである。

全ての同志諸君！労働者人民諸君！四・四足立自己批判はこのような西田の没主体性とボス交路線を背景にして出されている絶望的延命をかけた政治的のりきり策動であり、全くペテン的自己批判なのだということを確認しなければならない。

だからこそこの自己批判はただの形式的、技術的にしか書かれておらず、沖縄解放闘争に果した役割りとその政治的、思想的根拠の切開、そして根底的な自己批判になるはずもないのである。

足立商会派の没主体性、ボス交路線、闘う人民への愚弄、革命組織にあるまじき腐敗、そのような汚物にまみれたペテン的自己批判を弾劾する。われわれは闘う人民の名において絶対に許さない。彼等の個人的野心、名誉、自己保身の為だけの政治的のりきり策動を！被抑圧人民と革命派への背後襲撃の為だけに革命派の名を語り延命することを！

足立商会派は何故闘う人民に敵対するのか

1　本山闘争、沖縄解放闘争へのかかわりにおけるカクマル主義

足立商会派は今日広汎な闘う人民からみはなされ、孤立している。全金本山闘争からも召還し、沖縄解放闘争の中では先にも明らかにしたように一貫して闘う沖縄人民に襲撃、敵対を繰り返しており、朝鮮人民との連帯闘争においても労働者階級人民、戦闘的諸団体から見向きもされない程になっている。彼等が闘う人民から孤立してしまっているのは、闘う人民の利害を守るべく闘うのではなく、いつもそれに敵対し、帝国主義の侵略反革命や差別、抑圧攻撃に味方するからである。

それでは何故彼等が闘う人民に敵対せざるを得ないのかを本山闘争、沖縄闘争へのかかわりを見ることによって明らかにしておこう。

同盟戦旗派より脱落した足立商会派は戦旗派建設の不充分性を前向きに総括するのではなくその責任を全てわれわれにおしつけ、自らは清算主義的に第二次ブンドにあこがれ、われわれに対する政治・組織的力量の弱さを連合ブンドを夢想することによりカバーし延命しようとしたのである。その為の計画の第一が首都青年社研との組織的合同の追求であった。彼等足立商会派の本山闘争への介入は、本山闘争を闘っていた首都青年社研と合同する為にのみなされたのであり、本山資本より別棟就労攻撃、権力、右翼二組、暴力ガードマンからは暴力的弾圧をかけられ、それに対して断固たる実力闘争をもって闘い抜いていた本山支部労働者の要求の実現など関係なかったのだ。

その証拠に首都青年社研との合同が破産するや本山闘争からあっさりと召還してしまった。なんと闘う労働者人民を愚弄していることだろう。

組織拡大の為にのみ闘いに利用主義的にかかわるカクマルとどこが違うのか。闘う人民に奉仕し、利害を守り抜くという地平と切断されて組織がそれとして存在することに如何ほどの意味があるというのか。又そのような組織は何の為の組織なのだろう。このような関わりでは組織の主観的意志が人民に押しつけられることはあっても、決して闘う労働者人民の意志を代弁し、利害を守り抜くことはできず、必ずや人民に敵対せざるを得ないのだ。

本山闘争においては足立商会派の主観的企み（首都青年社研との合同→破産）によって召還という形で本山支部労働者と敵対したが、情況が異えば更に積極的に敵対するということも考えられる。それは沖縄解放闘争における沖縄人民襲撃に如実に示されているではないか。ともあれ彼等の階級闘争への関わりがカクマル主義であり、その故にこそ闘う人民に敵対せざるを得ないのだということが確認されなければならない。

足立の沖縄解放闘争への関わりも本山闘争の場合と全く同じなのだ。この場合第一の計画が破産してしまったので、計画の第二として烽火派との合同と、あわよくば沖解同分裂を利用して片方のIグループの獲得に展望を託そうとしたのである。

その為にのみ沖共闘を出て八・二五共闘に走り、海洋博粉砕沖縄ー「本土」実行委にも参加したのであり、海洋博粉砕、沖縄解放にかけた沖縄人民の利害など彼等にとってこれっぽっちも関係なかった。

だからこそ、われわれが足立商会派による解党行為の為、真に被抑圧民族・人民の闘う利害を守り切る戦旗派への脱皮をはかろうとし、一時的に沖縄闘争から離れつつも、再度階級的自己批判をかけ、沖縄人民との革命的連帯を求めてO・U裁判闘争ー沖縄解放闘争に決起しようとしたところ、自己の領分が犯されるという妄想にとりつかれてしまったのである。

足立商会派の第三の計画によれば烽火派との合同、Iグループの包摂が第一義的課題であるが故に、戦旗派の沖縄人民との革命的連帯をかけた沖縄解放闘争への参加はがまんできなかったのであり、闘う人民の意志とは無

関係に自己の主観的企みをおしつけ、沖縄人民、労働者人民に「党派闘争」の名をもって敵対を開始し、背後襲撃に血道を上げたのだ。

まさしくこれこそカクマルのやり口ではないだろうか。自組織の企みこそが唯一無二であり絶対的なものであって、この企みに人民を従わせることが革命だというならば、あまりにも尊大、ごう慢というものである。足立商会派の他にはカクマル以外このような革命を目指しているものはいないのだ。これでは人民は自身の解放を目指す限り、かかる組織と対決せざるを得ないし、足立商会派は必然的に解放を目指す人民に敵対する以外にないのである。

本山闘争においてもすこし情況が異れば、沖縄闘争におけると同じように本山支部労働者へのテロ集団としてたちあらわれたであろうことは想像に難くない。

以上のように足立商会派が闘う人民に敵対せざるを得ないのは、彼等のカクマル主義に起因していることが鮮明になった。彼等がカクマル主義を総括しない限り必ずや同じことを繰り返すだろう。以前マップ問題、HBF問題といったわれわれにとり反面教師として教訓化すべきことがあったにもかかわらず、その主体的総括をわれわれに対する批判をもって置き換えてしまったが故に、今日でも又同じ誤りを繰り返している。今回もペテン的自己批判によって政治的のりきりを策している以上彼等がかかわることはあり得ない。

だとするならば、われわれは、沖縄人民や全ての闘う人民と共にこのような反革命分子を階級闘争のかなたへ追放する以外にない。

2 純プロ路線、差別、排外思想を根底的に自己批判せよ

二・二〇反革命襲撃隊長土方は「お前(=沖縄人)が沖縄へ帰ってきたらおれ達がたたき出してやる」「お前(=沖縄人)は沖縄で何をやってきたんだ」なる許すべからざる差別暴言をはいたが、ここに足立商会派の純プロ路線、差別、排外思想の一切が集中的に表現されている。土方は「これは日本人に言ったのだ」として言いのがれようとしているが、この発言は土方と沖縄人労働者との論争の中で出て来たのであり、当事者がはっきりと確認しているのだから、如何に言いのがれようともこれを消し去ることはできない。

ニセセンキで「侵略反革命、差別分断支配と対決」とか「血債にかけて」等と左翼的言辞を並べたてようとも、裏にかくされた路線や思想は実践にあらわれるものなのだ。沖縄人民や被抑圧民族・人民を見下すのは、自己の階級的利害に立脚しているからに他ならない。足立商会派であればその立脚基盤はもともと小ブル学生層なわけだが、労働者階級にあこがれ、今では労働者の本工組合主義的利害に立脚している。都職や東交にもぐり込み、そこでの組合主義的運動にとくとくとしているのである。かかる運動を基軸にしている限り、彼等にとって被抑圧民族・人民と連帯し、その闘う利害を守る闘いなど二義的な意味しかないのだ。だから沖縄解放闘争を闘う場合には、ルンプロ、学生、高校生を動員するしか闘えない。部落解放闘争の闘い方等も組合運動に継ぎ木するような形でしかないし、基軸はやはり組合運動にあるのである。ウソだと思ったらよくよく足立商会派の労組活動家や青年部活動家の組織的実践を点検してみるがよい。いつもいつも、内部で反幹部とか賃上げとか言っていないと気がすまないのも、実は労組活動家的意識が不断に生み出されてくるからに他ならない。

このように足立商会派の路線は今だ純プロ路線以外の何ものでもなく、ただそれを隠蔽する為に口先だけの左翼的言辞を弄しているに過ぎない。純プロ路線では不断に他の階層、とりわけ被差別大衆を見下さずにはいられず、差別、排外思想を悪無限的に生み出すのである。更に始末におえないのは、カクマル主義であるが故に、そのような自己の路線が絶対であると思い込み、人民に対してその主観的意志を押しつけなければ気が済まないが故に闘う人民に敵対し、反革命的な背後襲撃をする以外になくなってくるのだ。沖縄解放闘争における無数の沖縄人テロルや二・二〇差別暴言こそその実践的帰結である。

足立商会派よ、西田―土方よ!諸君達の反革命襲撃路線は破産したのだ。ペテン的自己批判で絶望的延命をかけた政治的のりきりを策すのではなく、カクマル主義、純プロ路線、差別、排外思想を根底的に自己批判せよ!

全ての同志諸君!労働者人民諸君!ベトナム、カンボジア人民、韓国民衆が勝利し、チュー、ロン・ノル、朴反革命カイライ政権が打倒され、米日帝が追いつめられてゆくように、足立反革命も全ての闘う人民とわれわれの断固たる闘いによって反革命襲撃路線の破産を宣告され、ついに自己批判に追い込まれた。いまや闘う者、誰にも相手にされず没落への道をひた走っている。

だがしかし、他方に於いては沖縄人テロルの責任を下部や大衆に転嫁し、ボス交路線で延命をはかろうとしており、ペテン的自己批判でのりきろうとしている。われわれはこのような延命策を断じて許してはならない。足立商会派の階級闘争へのカクマル主義的=反革命的かかわり、その純プロ路線、差別、排外思想を根底的に批判、弾劾、粉砕しつくすのでなければならない。

足立商会派の腐臭をはなつ最後の延命策を絶対に許すな!

追記

この文章では足立商会派の「背後襲撃」について多く暴露しているが、足立のニセセンキ三四八号一〇頁で「日向一派の諸君よ!『背後襲撃』という言葉は現実に階級闘争の最前線で闘っている者のみが言える言葉なのですよ」等と「背後襲撃等という人聞きの悪い事を言わないでほしい」と泣きついているので若干つけ加えておく。足立商会派の諸君に聞きたい。階級闘争の最前線とは一体何処かね。権力に対する最前線なのだろうか。それともただ大衆に最も溶けた所にいるということなのだろうか。前者の意味ならばわれわれの方が諸君達より最前線にいるということは、全ての闘う人民が知っている。昨年の九月狭山決戦で諸君達は何処にいたのかね。われわれは狭山現地で日帝=寺尾の先兵たる狭山署―狭山市―日共の密集した反革命と決死的戦闘をもって約一ケ月間にわたり闘っていた。十一月フォード闘争の時は諸君達は何処に居た。われわれの後に居たのではないかね。われわれは諸君達の前で権力と闘い抜いていたのだ。だからこそ諸君達は権力に助けられてわれわれを襲うことができたのではないか。これも全ての左翼が知っている。

今年に入ってから二・一一、三・一、三・三〇と諸君達は二〇名弱でいったい何をしたというのだ。更に四・一九李打倒十五周年闘争の時はやはり二〇弱で立教でふやけた映画講演集会に逃亡していたではないか。われわれはその過程を全力で闘い四・一九には金芝河アピールに応え、安保―日「韓」体制を打倒すべく大統一行動を赤ヘル四百でけん引し、権力と肉弾戦をもって闘い抜いたのだよ。足立商会派の諸君達、これでわかってもらえただろうか。権力に対してであればわれわれ戦旗派の方が常に最前線に立ってきたことを。だとするならば「背後襲撃」という言葉をわれわれから諸君達になげつけることを許してもらえるだろうか。

最後に、ニセセンキ三四八号一〇頁の論文はまさにこの間の反革命的実践を正直にイデオロギー化した正真正銘の反革命的、反人民的論文で、実践と切断され、左翼的言辞のみで自己の反革命的本質を隠蔽していた、これまでの論文に比べ、実に正直に諸君達の反革命的主張を言いあらわしているという感想を述べておこう。次号にでも懇切ていねいに、しかも喜びをかくさず、批判させてもらうことにする。

もし諸君達に一片の革命的良心が残っているならば、あの反革命的論文はわれわれに壊滅的に批判される前に撤回し自己批判した方が諸君達の為であることを忠告しておこう。沖縄反帝戦線(準)の「同志」達が気がついたら絶対に認めないに違いないのだから。

2・11紀元節粉砕闘争の意義をふまえ
帝国主義天皇制攻撃に抗し
10月天皇訪米絶対阻止の一大戦列を!

全国の同志、友人、兄弟達!

われわれは二月十一日、首都圏の学生、高校生百余名の結集をつうじ、紀元節粉砕、朝鮮人民連帯集会を圧倒的に、革命的に克ち取った。

日本帝国主義ブルジョア共は現在、戦後ブレトン・ウッズ体制の崩壊をふまえ、全韓国、全アジアの「馬山化」を画策し、徹底した侵略反革命体制の構築にむけ、全社会の帝国主義的再編、帝国主義的再統合をいそいでいる。

これは六八年騒乱罪攻撃、六九年破防法弾圧体制を構造化させつつ、大決起、大高揚の気運をしめつけ、七三、七四春闘にみられた八百八十万労働者の大ゼネスト戦の展開等を反革命的におさえこみつつ延命してきたブルジョア共が、爆弾と火炎ビンをもっての革命的左翼の武装闘争の継続、ましてや九・二六無実の部落青年石川一雄氏奪還に大結集したかかる十二万被差別大衆、被抑圧人民大潮流の最後的な公然たる日帝打倒潮流としての登場におそれをなし、頭の先から爪の先までの再武装を考え、支配の上からの転換をいそいでいることを意味している。

今日、日帝支配者共は文字通りの支配の危機をむかえており、これまでどおりには人民を反革命的に統合しつづけえず、決定的な破局をむかえる以外なくなっており、これへの対処として行政権力の肥大化、議会制民主主義の空洞化を促進しており、これまでの議会制民主主義と戦後憲法理念=平和と民主主義」をかなぐりすて、全く新しい官僚的、警察的、暴力的支配を確立せんと画策せざるをえなくなっているのである。

十・三一大暴虐と十一・一八フォード来日にみられた十六万厳戒体制、実質上の戒厳令はその具体的あらわれである。

二・一一紀元節粉砕闘争の意義

二・一一紀元節粉砕闘争は、こういった現下の反革命的、反動的情勢に断固抗しつつ打ち抜かれることにより、次のような意義を獲得した。

それは第一には、この闘いを突破口としつつ、日帝のアジア侵略反革命と沖縄の反革命統合=大和による沖縄からの沖縄人排除を最大の攻撃の環とする、七・二〇海洋博開催に際しての皇太子の訪沖や、昨年十一月のフォード来日への国家元首的位置での見返り訪問たる、十月天皇訪米絶対阻止の切り口をつくり出したということである。

七月皇太子訪沖にしろ十月天皇訪米にしろ、それらは被差別大衆、被抑圧人民の七〇年代総反攻に対し、議会をつうじての支配の危機をむかえたブルジョア支配者共の、天皇家を前面に押し出した、新たな反革命的国民統合策以外の何物でもない。戦後憲法理念といわれた「平和と民主主義」や、「議会をつうじた民主主義」=ブルジョア民主主義を、支配者みずからが放棄し、警察的、官僚的、軍隊的人民支配を強め、アジア人民の再度の帝国主義的支配にむけた国内侵略反革命体制づくりをいそぐ日帝支配者共の、暴力的にして極めて人民抑圧的な強権的支配は、六八年騒乱罪、六九年破防法攻撃体制を更に構造化し、徹底する形で、現在すさまじい行政権力の肥大化、執行権力の自立化をつうじた治安弾圧体制構築として進行している。

この道を掃き清め、三十六年間にわたる、心の底から朝鮮人民、韓国民衆に階級的ザンゲを感じざるをえない、朝鮮植民地支配の歴史と主体的責任を何ら反省することなく、再び政治過程の主流の中におどりいで、真の抑圧者として、日本帝国主義の暴虐と乱暴、人間的尊厳の一切の蹂りんの人格的代弁者として、許すべからざるA級戦犯天皇ヒロヒトは、一昨年の訪欧につづき、訪米の旅にこの秋たたんとしているのだ。

このまさに米大統領フォードの来日への見返りとしての元首的位置でのヒロヒトの訪米を、われわれ日本人民は、不屈の闘魂をもった偉大なる韓国民衆や、無敵のヴェトナム人民に学ぶことによって、絶対に阻止しなければならない。

何よりもアジア人民へのはかりしれない歴史的血債にかけて、これを許さず、粉砕しつくさなければならない。

二・一一紀元節粉砕闘争は、首都の学生、高校生の結集をつうじ、命に賭けても侵略の尖兵にはもう再び、絶対にならないことを決意し、確信すると同時に、この天皇家の政治過程への一大登場、ヒロヒトやアキヒトをつうじた帝国主義支配者共の国民統合策=帝国主義天皇制攻撃への一大反撃の第一歩として打ち抜かれたのである。

この第一の意義は重大であり、この闘いの継続こそ、猛烈ですさまじく、はかりしれない勇気と決意にみちたヴェトナム、カンボジア人民にとことん学びきるべき責務を負うわれわれの、今後の主要な課題である。

第二には、二・一一紀元節粉砕闘争をつうじ、現在の帝国主義天皇制攻撃の内実をあばき出したということである。

現在の攻撃、天皇ヒロヒトの持ち出しは、日帝支配者共にとり、単なる天皇制イデオロギーの流布をつうじての、イデオロギー的国民統合につきるものではない。

その攻撃の性格はもっと階級的で露骨であり、全社会の一層の帝国主義的再編が、戦後ブレトン・ウッズ体制の総破産のなかで、議会をつうじての支配にブルジョア支配者共が展望をなくしており、従ってブルジョア独裁が主要には行政権力の悪無限的肥大化を基礎としつつ、官僚的、軍隊的、警察的執行権力への転成として進行しているという内実を持っている。

破防法治安弾圧体制の構造化は、十・三一無実の石川一雄氏への無期懲役判決と、それを下すに際しての首都戒厳体制に象徴されるような、朴やチューと全く同じことをいっても日帝がやる体制として、つくりだされつつある。

ここには権力支配の構造的転換が明確に存在しているのであり、これは一切の革命的左翼に非合法を強制し、あらゆる大衆運動を暴力的に抑圧し、自衛隊が公然と治安弾圧に登場する日の間近いことを物語っているのである。

このような帝国主義天皇制攻撃の内実をあばき出したこと、これこそが第二の意義としておさえられねばならないのである。

第三にこの二・一一紀元節粉砕闘争は、二・一二の韓国における維新体制の信任投票、韓国民衆の国民投票ボイコット戦との呼応のうちに打ち抜かれたものであることが、ふまえられねばならない。

東亜日報を先頭とする全知識人、学生の一体となった「自由言論実践宣言」、民主回復国民会議の一・六アピール、キリスト者の改憲請願運動、そしてソウル大や高麗大を中心とした全韓国学生の反日・反朴運動の大爆発に対する、現在の憎むべき、許し難き反カイライ支配者朴の人民抑圧は、民青学連事件八被告の、ありもしない「人民革命党」デッチ上げによる判決の翌日の死刑攻撃や、文世光の死刑、そして革命的な民族詩人金芝河の再逮捕と、歴史上かってない暴虐の限りをつくしている。

そして二・一二国民投票ボイコット運動と、投ぜられた全有権者の六割の賛成票は、その大半が朴一味のネツ造票であることを考えるならば、既に一部の反共右翼と日帝支配者そして他ならぬ朴一味を除いては、これを支持するものは韓国、日本をつうじ犬一匹いないことを示している。

この韓国民衆の真に主体的な戦いに学びつつ、韓国全土の属国化をはかり、朝鮮民族の尊厳をふみにじらんとする日帝支配者共の、アジア侵略反革命攻撃に抗し闘い抜くことは

比類なく重要である。

二・一紀元節粉砕闘争は、このような闘いへの決起として、雄国民衆との国際主義的連帯を求めた闘いであり、これこそが第二の意義なのである。

こうした闘いをつうじつつ、われわれは今秋期天皇訪米阻止へ総力決起、決死の覚悟をつうじた訪米絶対阻止の歴史的責務を負っているのであり、この闘いは全アジア人民への連帯において、「宗主」共への不退転の革命と打倒の闘いとして、昨秋フォード来日阻止闘争をも上回る重大にして重要な闘いとしてある。

われわれは、四・一九における三・一金芝河デビューに連帯した安保・日韓闘争の飛躍的発展をかちとり、倒韓闘争の意義を継承しつつ、夏期沖縄海洋博粉砕闘争を戦闘的に、革命的に戦取することをつうじ、この天皇訪米絶対阻止戦へ、全党、全軍、全人民の打て一丸となった団結をつちかいつつ、破竹の大進撃を続けなければならない。

この使命を断固たる決意のもとに、自己の肉体を弾丸と化す闘いとして実現することこそが、七五年階級闘争の最大の環であるとさえ言うことができるのだ。

世界の現実を説明できない足立版小ブル帝国主義

ところで、こうした秋期天皇訪米絶対阻止闘争を、現下の帝国主義天皇制攻撃との関連において、とらえ、正しい時代認識と情勢判断の下に、極めて積極的に、ラジカルに闘い抜くことが決定的な意義をもっている現在、わが同盟戦旗派の武装闘争路線に敵対し、口先だけの左翼的ポーズをとりつつ、その実純プロ主義と右翼日和見主義の、まさに社民的潮流へと党の改組を企だて、逃亡脱走した足立グループは、ブントの歴史とは縁もゆかりもないような中核派本多理論を盾用し、「国家形態のボナパルト的転換」などとほざくことによって、又もや言葉だけの左翼性をとりつくろうと必死になっている。

そればかりか、その時代対象化においても、既に破産し、歴史的にゴミ箱に捨てられた「さらば過渡期世界論」などをもちだし窃に、第二次ブントのゴミあさりの果て、データしかだけの、借りものと盗用とでデタラメだらけの、りりつとゴマ化しのみ感じられない、全く不潔な理論づくりをおこない、真摯な主体的反省をつうじ、階級的原点を洗い清めることにより、革命的再生をはかりつつある戦旗派の歴史と革命性を、又々ロで汚そうと企だている。

こうして全くデタラメな放言を主観的にほざき回ることにより、昨年十一月フォード来日時や、狭山九月決戦でみせた右翼日和見主義を、闘いのまっただ中において全面開花させ、戦旗派の革命的牙を公然と抜き取ることにより、少しずつ右翼潮流の仲間入りをし、最後には大下や本多＝城山などのめざした、総評青婦協内フラクションへと完全な全面改組してしまおうという彼等の意図は、その指導者が明大民同斎藤の子分で、戦旗派で一番右派だった西田であることをみんながみれば、全くお粗末としかいいようがないのだ。

われわれはこのような企だてを阻止し、天皇訪米絶対阻止の大戦闘を実現しきるために、まずもってここで足立グループの盗用理論への批判をなしきっておかなければならない。

それは現在のところ、大下の全く右翼的な「九州革命論」を全面的に継承した、今度は西田が書いた「現代過渡期世界論の深化と、カクマル主義者（つまり大下・城山のことかな？）との決別」＝十二・七政治集会基調報告への批判として、なしておけば十分である。

この論文なるものは序章から第四章まであり、見出しだけはいっぱいついているが、中味はとても薄く、同じようなことを何度も何度も、だんだん言っていることが変ってるような形で、一人よがりの窃に言っているだけの非常窃に稚拙な雑文にすぎない。

しかもその内容たるや、ブント七回大会のさらき直しの報告（＝「共産主義」12号のさらき文）や、同じく「共産主義」12号のさらき「現代帝国主義と過渡期世界における階級危機の性格と形態」論文からの借り物であり、又その骨格より体系的なものとしては、実にわい少なことに、「理論戦線」8号の日向論文をそっくり盗用しているにすぎないのである。

つまり西田はこの十二・七政治集会報告を、歴史的過去における第二次ブントの理論的所産から盗み取りつつ、さもさも自分達の理論的見解であるかのようにふるまって、九回大会の意義を継承し、ないし言いつつ、わが同盟戦旗派を批判したりもりになっているのだ。

だが、九回大会報告（＝「共産主義」13号）の骨子が、この「理論戦線」8号の日向論文による体系化にほとんどすべて依拠しており、それは政治的には赤軍派に向理論への対抗と、又六九年夏期に、来るべき七〇年安保決戦を前に、急遽野田啓志らの手により作り出されたものであることを、他ならぬわれわれが窃にたしかめて思っているのだ。

西田は二次ブントなどとはおよそ縁もゆかりもない、せいぜいが七〇年安保以降の全共闘くずれの足立メンバーを懐柔したいがために、金庫の中に忍しまっておいた古い『共産主義』や『理論戦線』をひっぱり出してきては、字句の一つ一つでも写しるる形で、全く没主体的なひょう窃をやって、厚かましくも恥じるところもなくそれその主要な内容はこうである。

①現代過渡期世界にあっては、金融寡頭制支配と資本過剰化・不均等発展という金融資本の必然的運動過程を基底要因としながらも、帝国主義は金融寡頭制支配の矛盾を膨大な過剰資本の処理に向けた対外膨張の過程を、「労働者国家の勢力的前進を封じ込めるものとして、反革命同盟を形成し、「この国際反革命同盟を巡る反革命世界支配の再編強化―覇権闘争として、侵略反革命を表現する。

「現代帝国主義は、その世界再分割戦、侵略反革命戦争を」「国際反革命統一戦の世界市場の政治的防衛を自らの世界反革命支配と自らの金融資本の基本的、死活の条件とせざるをえないという枠内で貫徹していかざるをえないし」

②「帝国主義列強は七〇年代世界再分割戦の必然的過程として全世界的侵略反革命戦争（体制）へと突き進んでおり」「益々過剰資本の処理を軍事ケインズ的による帝国主義の強力な国家的統制との金融寡頭制支配の最も高度な、最も危機的形態へと移行していき、それは現在のところ、大下の全く右翼的な「九州革命論」を全面的に継承した、今度は西田が書いた「現代過渡期世界論の深化と、カクマル主義者（つまり大下・城山のことかな？）との決別」＝十二・七政治集会基調報告への批判として、なしておけば十分である。

この論文なるものは序章から第四章まであり、見出しだけはいっぱいついているが、中味はとても薄く、同じようなことを何度も何度も、だんだん言っていることが変ってるような形で、一人よがりの窃に言っているだけの非常窃に稚拙な雑文にすぎない。

しかもその内容たるや、ブント七回大会のさらき直しの報告（＝「共産主義」12号のさらき文）や、同じく「共産主義」12号のさらき「現代帝国主義と過渡期世界における階級危機の性格と形態」論文からの借り物であり、又その骨格より体系的なものとしては、実にわい少なことに、「理論戦線」8号の日向論文をそっくり盗用しているにすぎないのである。

つまり西田はこの十二・七政治集会報告を、歴史的過去における第二次ブントの理論的所産から盗み取りつつ、さもさも自分達の理論的見解であるかのようにふるまって、九回大会の意義を継承し、ないし言いつつ、わが同盟戦旗派を批判したりもりになっているのだ。

だが、九回大会報告（＝「共産主義」13号）の骨子が、この「理論戦線」8号の日向論文による体系化にほとんどすべて依拠しており、それは政治的には赤軍派に向理論への対抗と、又六九年夏期に、来るべき七〇年安保決戦を前に、急遽野田啓志らの手により作り出されたものであることを、他ならぬわれわれが窃にたしかめて思っているのだ。

西田は二次ブントなどとはおよそ縁もゆかりもない、せいぜいが七〇年安保以降の全共闘くずれの足立メンバーを懐柔したいがために、金庫の中に忍しまっておいた古い『共産主義』や『理論戦線』をひっぱり出してきては、字句の一つ一つでも写しるる形で、全く没主体的なひょう窃をやって、厚かましくも恥じるところもなくそれその主要な内容はこうである。

①現代過渡期世界にあっては、金融寡頭制支配と資本過剰化・不均等発展という金融資本の必然的運動過程を基底要因としながらも、帝国主義は金融寡頭制支配の矛盾を膨大な過剰資本の処理に向けた対外膨張の過程を、「労働者国家の勢力的前進を封じ込めるものとして、反革命同盟を形成し、「この国際反革命同盟を巡る反革命世界支配の再編強化―覇権闘争として、侵略反革命を表現する。

「現代帝国主義は、その世界再分割戦、侵略反革命戦争を」「国際反革命統一戦の世界市場の政治的防衛を自らの世界反革命支配と自らの金融資本の基本的、死活の条件とせざるをえないという枠内で貫徹していかざるをえないし」

それこそ何の必然性もないではないか。

レーニン『帝国主義論』の論理、「五つの標識」（これも五田は標式などと書いている）から、どうして日Bによる帝国主義の強力な国家的統制との金融寡頭制支配の最も高度な、最も危機的形態へと移行していき、それは現在のところ、大下の全く右翼的な「九州革命論」を全面的に継承した、今度は西田が書いた「現代過渡期世界論の深化と、カクマル主義者（つまり大下・城山のことかな？）との決別」＝十二・七政治集会基調報告への批判として、なしておけば十分である。

この論文なるものは序章から第四章まであり、見出しだけはいっぱいついているが、中味はとても薄く、同じようなことを何度も何度も、だんだん言っていることが変ってるような形で、一人よがりの窃に言っているだけの非常窃に稚拙な雑文にすぎない。

しかもその内容たるや、ブント七回大会のさらき直しの報告（＝「共産主義」12号のさらき文）や、同じく「共産主義」12号のさらき「現代帝国主義と過渡期世界における階級危機の性格と形態」論文からの借り物であり、又その骨格より体系的なものとしては、実にわい少なことに、「理論戦線」8号の日向論文をそっくり盗用しているにすぎないのである。

つまり西田はこの十二・七政治集会報告を、歴史的過去における第二次ブントの理論的所産から盗み取りつつ、さもさも自分達の理論的見解であるかのようにふるまって、九回大会の意義を継承し、ないし言いつつ、わが同盟戦旗派を批判したりもりになっているのだ。

だが、九回大会報告（＝「共産主義」13号）の骨子が、この「理論戦線」8号の日向論文による体系化にほとんどすべて依拠しており、それは政治的には赤軍派に向理論への対抗と、又六九年夏期に、来るべき七〇年安保決戦を前に、急遽野田啓志らの手により作り出されたものであることを、他ならぬわれわれが窃にたしかめて思っているのだ。

西田は二次ブントなどとはおよそ縁もゆかりもない、せいぜいが七〇年安保以降の全共闘くずれの足立メンバーを懐柔したいがために、金庫の中に忍しまっておいた古い『共産主義』や『理論戦線』をひっぱり出してきては、字句の一つ一つでも写しるる形で、全く没主体的なひょう窃をやって、厚かましくも恥じるところもなくそれその主要な内容はこうである。

①現代過渡期世界にあっては、金融寡頭制支配と資本過剰化・不均等発展という金融資本の必然的運動過程を基底要因としながらも、帝国主義は金融寡頭制支配の矛盾を膨大な過剰資本の処理に向けた対外膨張の過程を、「労働者国家の勢力的前進を封じ込めるものとして、反革命同盟を形成し、「この国際反革命同盟を巡る反革命世界支配の再編強化―覇権闘争として、侵略反革命を表現する。

「現代帝国主義は、その世界再分割戦、侵略反革命戦争を」「国際反革命統一戦の世界市場の政治的防衛を自らの世界反革命支配と自らの金融資本の基本的、死活の条件とせざるをえないという枠内で貫徹していかざるをえないし」

「純経済的概念」をうのみにする経済主義者の理論

それは第一には、帝国主義の基本的なモメントを、すべて「過剰資本の処理」「ますます過剰となる資本の処理」から説き、金融寡頭制支配をかかるファクターにおいて理解していることからきたされている。

経済学の見地からみて余り正しいとは言えないレーニンの「帝国主義論」中においても、「資本の輸出」は次のような文章で説明されている。

「資本主義が資本主義であるかぎり、過剰の資本はその国の大衆の生活水準を引き上げるためにはもちいられないでなぜならそうすれば資本家の利潤は下がるから、資本を外国に、後進諸国に輸出することによって、利潤を高めることにもちいられるのである」（国民文庫本八一頁）

このあと一段続く文が「これらの後進諸国では利潤が高いのが普通である」をみてもわかるように、資本の対外投下はあくまでも高利潤と、より大なる剰余価値を求めてなわれる。又、対外投資の場合には高利をあてなされる。資本の優越性に、この大なる剰余価値や利子を求めて動き回る点にこそあり、だからこそ帝国主義は極めて貪欲にして、えげつなく、容赦ないものなのだ。

レーニンは帝国主義の強力な国家的統制との金融寡頭制支配の最も高度な、最も危機的形態へと移行していき、それは現在のところ、大下の全く右翼的な「九州革命論」を全面的に継承した、今度は西田が書いた「現代過渡期世界論の深化と、カクマル主義者（つまり大下・城山のことかな？）との決別」＝十二・七政治集会基調報告への批判として、なしておけば十分である。

この論文なるものは序章から第四章まであり、見出しだけはいっぱいついているが、中味はとても薄く、同じようなことを何度も何度も、だんだん言っていることが変ってるような形で、一人よがりの窃に言っているだけの非常窃に稚拙な雑文にすぎない。

しかもその内容たるや、ブント七回大会のさらき直しの報告（＝「共産主義」12号のさらき文）や、同じく「共産主義」12号のさらき「現代帝国主義と過渡期世界における階級危機の性格と形態」論文からの借り物であり、又その骨格より体系的なものとしては、実にわい少なことに、「理論戦線」8号の日向論文をそっくり盗用しているにすぎないのである。

つまり西田はこの十二・七政治集会報告を、歴史的過去における第二次ブントの理論的所産から盗み取りつつ、さもさも自分達の理論的見解であるかのようにふるまって、九回大会の意義を継承し、ないし言いつつ、わが同盟戦旗派を批判したりもりになっているのだ。

だが、九回大会報告（＝「共産主義」13号）の骨子が、この「理論戦線」8号の日向論文による体系化にほとんどすべて依拠しており、それは政治的には赤軍派に向理論への対抗と、又六九年夏期に、来るべき七〇年安保決戦を前に、急遽野田啓志らの手により作り出されたものであることを、他ならぬわれわれが窃にたしかめて思っているのだ。

西田は二次ブントなどとはおよそ縁もゆかりもない、せいぜいが七〇年安保以降の全共闘くずれの足立メンバーを懐柔したいがために、金庫の中に忍しまっておいた古い『共産主義』や『理論戦線』をひっぱり出してきては、字句の一つ一つでも写しるる形で、全く没主体的なひょう窃をやって、厚かましくも恥じるところもなくそれその主要な内容はこうである。

①現代過渡期世界にあっては、金融寡頭制支配と資本過剰化・不均等発展という金融資本の必然的運動過程を基底要因としながらも、帝国主義は金融寡頭制支配の矛盾を膨大な過剰資本の処理に向けた対外膨張の過程を、「労働者国家の勢力的前進を封じ込めるものとして、反革命同盟を形成し、「この国際反革命同盟を巡る反革命世界支配の再編強化―覇権闘争として、侵略反革命を表現する。

「現代帝国主義は、その世界再分割戦、侵略反革命戦争を」「国際反革命統一戦の世界市場の政治的防衛を自らの世界反革命支配と自らの金融資本の基本的、死活の条件とせざるをえないという枠内で貫徹していかざるをえないし」

それこそ何の必然性もないではないか。

レーニン『帝国主義論』の論理、「五つの標識」（これも五田は標式などと書いている）から、どうして日Bによる帝国主義の強力な国家的統制との金融寡頭制支配の最も高度な、最も危機的形態へと移行していき、それは現在のところ、大下の全く右翼的な「九州革命論」を全面的に継承した、今度は西田が書いた「現代過渡期世界論の深化と、カクマル主義者（つまり大下・城山のことかな？）との決別」＝十二・七政治集会基調報告への批判として、なしておけば十分である。

この論文なるものは序章から第四章まであり、見出しだけはいっぱいついているが、中味はとても薄く、同じようなことを何度も何度も、だんだん言っていることが変ってるような形で、一人よがりの窃に言っているだけの非常窃に稚拙な雑文にすぎない。

しかもその内容たるや、ブント七回大会のさらき直しの報告（＝「共産主義」12号のさらき文）や、同じく「共産主義」12号のさらき「現代帝国主義と過渡期世界における階級危機の性格と形態」論文からの借り物であり、又その骨格より体系的なものとしては、実にわい少なことに、「理論戦線」8号の日向論文をそっくり盗用しているにすぎないのである。

つまり西田はこの十二・七政治集会報告を、歴史的過去における第二次ブントの理論的所産から盗み取りつつ、さもさも自分達の理論的見解であるかのようにふるまって、九回大会の意義を継承し、ないし言いつつ、わが同盟戦旗派を批判したりもりになっているのだ。

だが、九回大会報告（＝「共産主義」13号）の骨子が、この「理論戦線」8号の日向論文による体系化にほとんどすべて依拠しており、それは政治的には赤軍派に向理論への対抗と、又六九年夏期に、来るべき七〇年安保決戦を前に、急遽野田啓志らの手により作り出されたものであることを、他ならぬわれわれが窃にたしかめて思っているのだ。

西田は二次ブントなどとはおよそ縁もゆかりもない、せいぜいが七〇年安保以降の全共闘くずれの足立メンバーを懐柔したいがために、金庫の中に忍しまっておいた古い『共産主義』や『理論戦線』をひっぱり出してきては、字句の一つ一つでも写しるる形で、全く没主体的なひょう窃をやって、厚かましくも恥じるところもなくそれその主要な内容はこうである。

①現代過渡期世界にあっては、金融寡頭制支配と資本過剰化・不均等発展という金融資本の必然的運動過程を基底要因としながらも、帝国主義は金融寡頭制支配の矛盾を膨大な過剰資本の処理に向けた対外膨張の過程を、「労働者国家の勢力的前進を封じ込めるものとして、反革命同盟を形成し、「この国際反革命同盟を巡る反革命世界支配の再編強化―覇権闘争として、侵略反革命を表現する。

「現代帝国主義は、その世界再分割戦、侵略反革命戦争を」「国際反革命統一戦の世界市場の政治的防衛を自らの世界反革命支配と自らの金融資本の基本的、死活の条件とせざるをえないという枠内で貫徹していかざるをえないし」

それこそ何の必然性もないではないか。

レーニン『帝国主義論』の論理、「五つの標識」（これも五田は標式などと書いている）から、どうして日Bによる帝国主義の強力な国家的統制との金融寡頭制支配の最も高度な、最も危機的形態へと移行していき、それは現在のところ、大下の全く右翼的な「九州革命論」を全面的に継承した、今度は西田が書いた「現代過渡期世界論の深化と、カクマル主義者（つまり大下・城山のことかな？）との決別」＝十二・七政治集会基調報告への批判として、なしておけば十分である。

この論文なるものは序章から第四章まであり、見出しだけはいっぱいついているが、中味はとても薄く、同じようなことを何度も何度も、だんだん言っていることが変ってるような形で、一人よがりの窃に言っているだけの非常窃に稚拙な雑文にすぎない。

しかもその内容たるや、ブント七回大会のさらき直しの報告（＝「共産主義」12号のさらき文）や、同じく「共産主義」12号のさらき「現代帝国主義と過渡期世界における階級危機の性格と形態」論文からの借り物であり、又その骨格より体系的なものとしては、実にわい少なことに、「理論戦線」8号の日向論文をそっくり盗用しているにすぎないのである。

つまり西田はこの十二・七政治集会報告を、歴史的過去における第二次ブントの理論的所産から盗み取りつつ、さもさも自分達の理論的見解であるかのようにふるまって、九回大会の意義を継承し、ないし言いつつ、わが同盟戦旗派を批判したりもりになっているのだ。

だが、九回大会報告（＝「共産主義」13号）の骨子が、この「理論戦線」8号の日向論文による体系化にほとんどすべて依拠しており、それは政治的には赤軍派に向理論への対抗と、又六九年夏期に、来るべき七〇年安保決戦を前に、急遽野田啓志らの手により作り出されたものであることを、他ならぬわれわれが窃にたしかめて思っているのだ。

西田は二次ブントなどとはおよそ縁もゆかりもない、せいぜいが七〇年安保以降の全共闘くずれの足立メンバーを懐柔したいがために、金庫の中に忍しまっておいた古い『共産主義』や『理論戦線』をひっぱり出してきては、字句の一つ一つでも写しるる形で、全く没主体的なひょう窃をやって、厚かましくも恥じるところもなくそれその主要な内容はこうである。

①現代過渡期世界にあっては、金融寡頭制支配と資本過剰化・不均等発展という金融資本の必然的運動過程を基底要因としながらも、帝国主義は金融寡頭制支配の矛盾を膨大な過剰資本の処理に向けた対外膨張の過程を、「労働者国家の勢力的前進を封じ込めるものとして、反革命同盟を形成し、「この国際反革命同盟を巡る反革命世界支配の再編強化―覇権闘争として、侵略反革命を表現する。

「現代帝国主義は、その世界再分割戦、侵略反革命戦争を」「国際反革命統一戦の世界市場の政治的防衛を自らの世界反革命支配と自らの金融資本の基本的、死活の条件とせざるをえないという枠内で貫徹していかざるをえないし」

何故かかる歴史的過程が問題となり、帝国主義の「五つの基本的な標識」とのかかわりを持つのかといえば、つまり金融資本主義とはこの株式会社形態を媒介とし、製鉄と石炭に独占体を形成したドイツにこそ典型を求めるべきだからであり、五つの標識の前二者はドイツにあてはまりこそすれ、イギリスやフランスには直接該当しないからである。

又、帝国主義段階論は、あくまでも歴史的な資本主義の一歴史発展段階の具体的過程の分析として対象化されるべきであり、論理主義的に原理化されるべきではないことが、ここで明確になるのである。

論理的には、一八七〇年代の大不況期に促進された重工業での株式会社形態による社会的遊休資金の動員、そして産業資本への資金貸与と株式の発行引き受けによって、産業資本の集中とそれへの支配を促進する銀行の役割り、両者の絡み合いと金融寡頭制としての成立のメカニズムこそが問題とされるべきなのであり、それこそが「金融資本主義論」、言い換えれば「帝国主義論」のガイストとなるはずなのだ。

レーニンの業績は、こうした論理的な展開においては不充分性を有しつつも、一九一六年という時点において現実に惹起した戦争の性格を明確化し、「帝国主義戦争を内乱へ」という戦略を提起することにより、プロレタリア革命への導きの糸をつくりだしたことにあるのであり、現状を分析し解明しきったリアリズムの中にこそあるのだ。

こうした点を正しく対象化し、とらえかえしていくならば、金融資本や帝国主義のモメントを、全く手前勝手な主観的な、しかもとても程度の低いレベルで理解し、教条化している西田の滑稽さというものが、ますますはっきりしてくるのである。

歴史的な分析を原理化し、法則化しているが故に、レーニンの一九一〇年代のヨーロッパの分析にあわせての展開と一体化させたつもりになっている足立一派の、無内容極まりない時代認識、現代過渡期世界論なるものは、おそろしく現実とかけはなれており、ただの念仏にしかなっていないのだ。

だがそれでは、革命的なレーニン主義のガイストの継承とはとてもいえず、ただのマネであり、空論にすぎないのだ。

少くとも「五つの標識」には、①ドイツ的な典型とイギリス的なそれの混在化があること、②前二つと後三つは区別されて見られるべきこと、従って③それをすべて帝国主義の一般類型とすることはできないこと、又④五つの項目のそれぞれの間には、論理的に連関した系が直接あるわけではないこと位は、西田も新左翼を名乗りたいのならおぼえておくことだ。

「私は私の小冊子が、それを研究しないと現在の戦争と現在の政治を評論するうえでなにひとつ理解できない基本的な経済問題、すなわち帝国主義の経済的本質の問題を研究する助けとなることを期待したい」と「序文」で述べたレーニンのこの意図をくむのなら、一九七四年の「現在の戦争と現在の政治の性格」をつかみとるために苦闘することこそが、レーニン主義者たらんとするものの使命であり、それは論理への無内容すぎる現実のアテハメ志向を克服することによってのみ可能なのだ。

それこそが創造的レーニン主義の立場なのだ。

である。

後にいく程内容が変る、西田の破産カトキ論

第三の問題として、「過剰資本の処理」から説く「帝国主義の論理」なるものへのアテハメ、アナロジー志向のあやまりと同時に、他方の系における「侵略反革命が国際反革命同盟の再編強化の中での覇権あらそいとして表現される」という、帝国主義の国際協調と、反革命同盟の形成理解について論及されなければならない。

それは素朴に質問して、要するにどういうことなのかをまず問うてみる必要がある。

「侵略反革命が、国際反革命同盟の再編強化―覇権闘争として表現される」というのは、わかったようで実はさっぱりわからない概念である。

何故ならば、「侵略」は「過剰の資本」の「植民地従属国への輸出」の必然性にあると展開しているのだから、それが「反革命同盟の覇権争い」として表現されるというのは、結局「植民地従属国」への〃援助のしあい〃〃金のだしあい〃が、「全世界的侵略反革命戦争（体制）」なるものの内実となるのであろうか。

日帝や西独帝が、アメ帝との対抗のうちに経済援助や借款をやり合い、かくして「日帝は東南アジア市場で米帝を駆逐し」「西欧（西独）帝はECの形成を通じて米帝との対抗関係を作り出した」などと考えているのなら、西田のいう「全世界侵略反革命戦争」などというものは、全く平和ボケした合法主義的なものであり、「ボナパ反革命攻撃」などの必要性は全くないものなのである。

全くムード的に抽象的なことを観念的＝思いつき的に言っているだけだから、かような平和主義的な結論しかでてこないことになるのだ。

言い換えれば、要するにどういうことなのかはっきり言えることとして、西田は「侵略反革命が―国際反革命同盟の―覇権闘争として表現される」なる論理を展開しているわけではないのだ。ムード左翼につきものの気分的な言辞として、そんなことを言っているにすぎず、ただの空論である。

第四の問題として、同じく何故「過剰資本の処理」↓「不均等発展」↓「帝国主義間戦争」という「必然的運動過程」を持った帝国主義が、そもそも「国際反革命同盟」を結び、「米帝の侵略反革命戦争への協力体制」を形成するのか、その必然性を西田君に聞いてみなければならない。

それは「労働者国家の勢力的結集」と「植民地従属国人民の民族解放闘争の前進」のためであるというのなら、そのような要因が「帝国主義の必然的運動過程」を外的に規制している、まさにこの現代過渡期世界においては、「帝国主義の論理」とかは貫徹していないことになり、そもそもそれだけを軸として世界を対象化することはできないということになるのではないのかね。

帝国主義列強の対抗軸は、他帝国主義にあるのではなく、労働者国家と第三世界に対してあることになり、西田の考えている「帝国主義間戦争の必然性」とだいぶちがうことになるのだ。

こういった率直な疑問に対して困りはてた西田は、この「十二・七政治集会報告」中において、実に驚くべきことに、当初には「労働者国家及び国内階級闘争を反革命的に封じ込めることを通じて」「帝国主義は市場再分割戦から帝国主義間戦争を強行する」（ニセ『戦旗』三四五号　九頁）と、「はじめ」と「後」論みたいなことを言っていたのが、次第に「世界再分割戦の決定的に重要な基軸である列強内覇権争いは、帝国主義間戦争による結着として発現することなく、あくまでも国際反革命同盟の強化をめぐる覇権闘争として貫徹せざるをえず」（ニセ『戦旗』十三頁）などと、主要な内容そのものを言い換えているのである。

だがそんな不様なゴマ化しに、オチョクラれるマルクス主義者がいると思っているのか。

当初西田が主張しているのは、まず労働者国家や国際階級闘争をやっつけてから、帝国主義間戦争になるということであり、後になって言っているのは、帝国主義間戦争として発現しないということである。

だがこれは、まるきり全く逆の内容ではないか。語るにおちるとはまさにこのことである。

つまり論理的展開の系そのものが、西田の主張にあってはいろいろなところでスリかわるのであり、西田のカメレオン的本質を体現している。

結局のところ、あとの主張に従えば、現代過渡期世界の対立抗争の基軸は、帝国主義対労働者国家、帝国主義対第三世界の中にあることになり、帝国主義どうしの覇権争いは、この闘いに従属したものとなるのであり、前半に展開してきた「帝国主義世界論」、「帝国主義の必然的運動過程」、「市場分割―帝国主義間戦争の強行」論は、どこかにふきとんでしまうのである。

だがまさに、このあとの主張こそは、われわれが六九年三月の『理論戦線』8号日向論文の総括的継承として、七〇年六月の『理論戦線』9号日向論文（特にその一向過渡期世界論の批判）や、七一年十月の『理論戦線』11号野田晋論文「第二次共産同の戦略論上の総括」、そして九中委議案、十一中委議案（それぞれ『共産主義』14号と同15号）などをつうじ深め、対象化してきたことなのだ。（最近のものとしては『戦旗』三五五号「最近の世界経済過程の現状と動向」を参照）

しかもこの過程にあっては、宇野経済学の批判的摂取をつうじた、レーニン『帝国主義論』そのものの分析と切開、そして歴史的対象化という作業が横たわっているのであり、浅学極まる西田の空疎な原稿用紙のマス埋めとは大分異なる、まさに主体的苦闘と内省、主体的切開に支えられた内容なのである。

われわれの真摯な自己批判、アジア人民への日本人民としての歴史的血債を反省し、主体的に「猛省精神」としてつかみとろうとした七四年七月の苦闘を、全くふざけて客観視し、「モウセイ主義」などとアザ笑っていた西田の革命主体としてのウスっぺらさは、かくして、主張そのものの全面破産と混乱、盗用とひょう窃でもなお間違っているという沈

没として、ここに白日の下に暴き出されてしまったのである。

すなわち西田が「九回大会」の全面継承などとほざいているその論旨、帝国主義の対立と市場分割戦を、「過剰資本の処理」から必然化させて世界を見る見方、「帝国主義世界論」では、まさに現代帝国主義の国際反革命同盟の形成や、米帝への各国帝国主義の協調加担、そして「肩代り」や、ECの形成、IMFの崩壊的危機に対する協力体制の形成といったモメントはことごとく、全くもって論証不可能となってしまうのであり、「帝国主義の必然的運動過程」を法則化して、それに合わせて世界の動向を解釈しようとしても、論理が現実に接近することは全くない、そういった結論がここに与えられているのである。

現代過渡期世界は、西田の考えとは全く逆に、戦後一貫して勢力を弱め、後退し、死滅しつつある資本主義として爛熟の極に達した帝国主義が、これまで分割してきた世界を、他帝国主義にではなく国際階級闘争＝第三世界の台頭と、労働者国家の形成↓確立において失い、奪われつつあり、帝国主義はそれを守り、権益を確保しつづけるために互に結束し、第三世界人民と労働者国家への反革命同盟を形成し、又国内人民を互いに争わせようとし、差別政策をしき、治安弾圧体制を恒常化させ、国家権力の徹底した官僚的、警察的、軍隊的権力への転成を画策しつつある、まさにそのようなものとしてあるのだ。

カンボジア人民やヴェトナム人民の勝利、そして何よりも決定的なことは、米帝をしてそこに手を出せなくさせている、かような被抑圧人民、被差別大衆の総決起の時代、帝国主義が打ち破られすべての領域において後退を強いられている時代、まさにそれこそが現代過渡期世界の基調だということが、西田にはわかっていないのである。

なだれうつ帝国主義の敗走、そしてすさまじく猛烈で、果敢で勇気にみちた、巨大なる人民の雄叫び、ひたひたと押し寄せてくる人民の勝利の足音、西田よ、お前の右翼日和見主義の耳アカのつまった耳には、この素晴しい世界の叫喚が何一つ聞こえないのか。

お前の眼には今でも帝国主義が強大で、ぬきさしならぬ楽園に見え、そこに千年王国があると映るのか。だとすればお前こそ、闘うアラブ、アフリカ、アジア人民、なかんずく韓国民衆、部落大衆、在日朝鮮人、沖縄人のすべての敵であり、帝国主義の友であり、ブルジョア御用左翼そのものだ。

大体「九回大会」の継承というが、九回大会で確定しようとした基軸はまさにそういうことだったのであり、西田の考えているものとは大分ちがうのである。

ともあれ結論的に言って、かくして「帝国主義の対外膨張」「市場分割」「帝国主義間戦争の必然性」という古いシェーマを教条化し、過渡期世界理解の基軸にすえつけようとした西田の試みは、ことごとく現実世界の動向を説明しえず、又無関係なものになることによって破産し、論理矛盾におち入り、はじめと終りで全く逆のことを言い、何一つスジのとおらぬものとなっているのであり、全く総破産をとげていることが鮮明になるのである。

その結果、自己の論理の展開からは、「国際反革命同盟の形成」にしろ、IMF＝GATTを守らんとする国際協調にしろ、ニクソン・ドクトリン以来の「肩代り」にしろ、何一つ論証できなくなった西田は、途中から得意の「のりうつり」をおこない、論理のつじつまを合わせたつもりになっているが、しかしそうすることによって「帝国主義の必然的運動過程」「過剰資本の処理」「不均等発展↓市場分割戦↓帝国主義間戦争」なる一九一〇年代的シェーマをもって説こうとした過渡期世界論なるものは、論理の基軸そのものが崩れてしまい、結局中途半端の盗用、借りもの理論以外の何物でもないことの馬脚をあらわしたのである。

同じようなことを言いたいのなら、「二つのガイスト論」をつうじつつ、帝国主義といわゆる後進国（＝第三世界）、「労働者国家」分析の視点を区別し、帝国主義の反革命攻撃、階級闘争圧殺策動のモメントから、「外的な政治的・軍事的要因」を中心に展開した、今から丸々六年前に提起された、社学同時代の『理論戦線』8号日向論文、「革命論方法論上の主体的立場の解明」のほうが、はるかに構造的で体系的で、説得力にみちている。（現に中核派の現在の内容も、これを越えていない）

西田は「九回大会の継承」などと言いつつ、これをひょう窃し、さらぎの情勢分析で色をつけようと（「過剰資本の処理」論こそ、さらぎの「帝国主義崩壊の原理と形態論」なるビックリ自動崩壊論の基礎である）しながら、ただの言葉だけのマネとひょう窃以上のものとなりえず、論理的に総破産をとげたのである。

足立版サル真似「ボナパ転換論」の空論性

最後に、現在の帝国主義国家権力の反革命的再編の進行、帝国主義天皇制攻撃に関する諸点についても、足立版「ボナパ的転換論」のギマン性としてあばき出しておかなければならない。

すなわち西田が、「日帝の国家権力の転換、議会制民主主義から侵略反革命戦争―ファシズム権力への一大飛躍、それへの過渡、ボナパ反革命攻撃こそ」うんぬんと言っている、「ボナパ反革命攻撃」なるものの内実について見ておかなければならない。

まずもってこの国家形態の「ボナパ的転換」などという用語であるが、それはもともとは『紀元節と天皇制』にまとめられた、中核派の故本多延嘉の、明治政体と天皇制をめぐる主張、「天皇制ボナパルチズム論」からの用語的ひょう窃以外の何物でもない（もっとも本多延嘉のモトはトロツキーの『唯一の道』という具合に、更に先があるのだが）

そこでは「ボナパルティズム」なる用語は、日共の理論家でかってあった神山茂夫の「天皇制絶対主義論」や、志賀義雄の「天皇制ファシズム」という規定に対し、明治維新において一八六八年に成立した近代的統一国家は、「それ自身としては封建的家臣団が、軍事的警察的官僚制に転化することによって形成された極めて絶対主義的な国家であった」が、「半封建的な土地貴族とブルジョアジーの均衡の上に成立した絶対主義天皇制は」明治三十年代に「すくなくとも明治三十一年の隈板内閣の成立以後、その解体―ブルジョア的変質の過程に席をゆずり」

「絶対主義でもファシズムでもない、別のブルジョアジーの『例外的国家』としてのボナパルティズム的君主制」、つまり「天皇制ボナパルティズム」としての「ブルジョアジーの統治形態」を生みださしめ、それは一九四五年の敗戦まで続いた。すなわち「敗戦により天皇制ボナパルティズムの崩壊↓ブルジョア的議会民主制の確立の過程」をむかえたとして論じられ、定式化されているものである。

又この明治政体をめぐる諸規定については、二七年テーゼなり三二年テーゼが問題とされること、つまり二七テーゼには、「一八六八年の革命は日本のブルジョア的発展に道をひらいた。しかしながら政治権力は封建的諸要素の手中に、大土地所有者および軍閥と宮廷徒党の手中にとどまった」「現在の日本の国家権力は資本家と地主のブロックの手中にある」「日本は膨大なる全アジア大陸における第一級の帝国主義強国となった」という規定があり、さらにこれに対し三二テーゼにあっては「日本に存在する絶対主義的支配はブルジョアジーおよび地主の勤労者に対する独裁の形態として、その抑圧的なる点において他の資本主義諸国におけるファシズムに決して劣るものではない」「勝利せる人民革命によって天皇制が転覆されたのちには、ブルジョア民主主義革命を社会主義革命に強行的に転化せしめるための闘争が、党の根本的任務となる」といった提起がそれぞれあることを、おさえておかなければならない。

要するにそれは、①明治維新で成立した国家政体やその権力規定、②明治二十年代の帝国憲法の発布とそれ以後のブルジョア階級の台頭をつうじ、確立された権力の性格、③明治三十年代、すなわち二十世紀に入ってからの権力の規定などをめぐり、それぞれテーゼ化されているところのものであり、「天皇制」をめぐる論及の中にその主要な命題はあるのである。

特に、絶対主義なり、ボナパルティズム概念については、レーニンが『国家と革命』〈被抑圧階級を搾取する道具としての国家〉において主要に引用し、規範としているエンゲルスの『家族、私有財産と国家の起源』中の重要な部分、「例外的にはたがいに闘争する階級が、相互にほぼ均衡を保ち、国家権力が外見上の仲裁者として、一時的に或る程度の自主性をもつような時期があらわれる。例えば十七、八世紀の絶対王制は封建貴族と市民階級を相互に均衡させた。またフランスの第一、第二帝政のボナパルティズムは、プロレタリアートをブルジョアジーに対して、ブルジョアジーをプロレタリアートにけしかけて利を占めた　」なる一節を忘れることはできない。

これらの諸内容を前提としたうえで足立グループ、西田の主張している「ボナパ転換論」なるものをみてみるならば、それは無内容なタダのひょう窃用語にすぎず、論理的必然性を一切持っていないこと、盗んだ言葉をしゃべっているだけのものでしかないことが、一目瞭然となるのである。

つまり第一には、西田は「ボナパルティズム国家形態は、『過渡期の例外的国家』で

あるとか、後進資本主義の特有の国家であるとか、「民主主義的な環境はボナパルティズムとは相いれない」等の諸規定はすべて誤りである」と言い、「それは産業資本主義段階、帝国主義段階、過渡期世界をとわず、階級闘争の必然的結果として内乱時代、革命闘争の内乱期において成立の可能的根拠をもつ反革命国家形態だからである」などといい、これを「ファシズム権力への一大飛躍」への過渡」と規定していわけだが、このような問題のたて方はすべて誤りである。

何故ならば、中核体の本多延嘉の場合には、ブルジョアと封建地主の均衡の上に成立した絶対主義的権力として、明治維新で成立した統一国家の権力の変質としてブルジョア支配の過渡的な専制的、暴力的形態たるボナパルティズムを天皇制との関係で論じているわけである。

われわれ戦旗派の理論的歴史性から考えた場合、一般的に明治維新をブルジョア革命ととらえる見解に支配されてきた（例えば「部落解放への飛翔」での「明治維新はブルジョア革命の一過程としてあり、維新政府によって封建制は解体されていった」など）わけだが、しかし現在的にはむしろ「二七テーゼ的内容としての明治維新をとらえる」つまり明治維新は「日本のブルジョア的発展に道をひらいた」しかしながら政治権力は封建的諸要素の手中に、大土地所有者および軍閥と宮廷従党の手中にとどまった」ものとしてみるべきであり、こうして絶対主義的色彩を持って成立した明治政体が、明治三十年代をつうじブルジョアと地主的権力への変質を、地主ブルジョアの権力からなしていき、ブルジョア権力を実体とする天皇制ファシズムへの転成をとげていったものとしてとらえかえす必要がある。

つまり明治三十年代をつうじた、大土地所有とブルジョアの均衡の上に成立した「例外的国家」としての絶対主義の、ブルジョア権力への転成であり、そこで成立するブルジョア権力もまたプロレタリアートの世界史的な登場と、例えば大正デモクラシーなどをつうじた民主主義気運の高まりのなかで、これへの対抗として本来的には分割地農民と規定できる過小農制との結合のうちに、専制的軍隊的暴力的天皇制ファシズムとして地主的要素をも含みつつ、自己を表現し侵略を実現したとみなすことができる。

しかるに西田の言っていることは、いわばこういった明治政体権力なりの、歴史的な権力規定、段階論的把握にもとづいた地主的＝封建的権力（絶対主義的な本質的にはそのようなものである）のブルジョア統治形態への移行に際しての諸カテゴリー、ないしは一八四八年六月のフランスに見られるプロレタリアートの政治勢力としての歴史的登場に対する、ブルジョアの危機に支えられた「共和制」への変質、ボナパルティズムの専制への転成として、つまり歴史的な範疇を吟味することによって「ボナパルティズム」を見るのではなく、超歴史的に資本主義のすべての段階をつらぬいて、階級闘争の高揚期にあらわれる「反革命的国家形態」をおしなべて「ボナパルティズム」と規定しているのである。

だがこういった見方にたつならば、資本主義社会そのもののブルジョア権力、ブルジョア支配は、そもそもその成立の当初からプロレタリアートの政治勢力に対しては反革命的なものなのだから、全部「ボナパルティズムへの過渡形態である」などとトンチンカンなことを言っていることになってしまうのである。

つまり中核派の例としては、六〇年安保の内乱的高揚状況に対峙した岸内閣はボナパルティズム、大管法の施行もボナパルティズム、日韓七〇年安保に至る騒乱罪や破防法適用の攻勢内閣もボナパルティズムという具合に、要するに誰でも、五月革命のドゴールも、非常事態法のキージンガー＝ブラント「大連合」も、みんな反革命的な人民統合をなした者は「ボナパルティスト」であり、その政治権力は「ボナパルティズム」であるということにならざるをえないのだ。

これに対し戦後の改革、帝生地の廃止による農地改革や、天皇制ファシスト勢力の戦犯としての追放は、まさに米帝独占資本による日帝内の封建的諸勢力の残存の一掃、封建的大土地所有者の最後的解体の過程として、ブルジョアの変革の完遂としてなされたのであり、独禁法による財閥の解体も、旧勢力のレタリアートの政治勢力に対しては反革命的な環境はボナパルティズムへの過渡形態である」などとトンチンカンなことを言っていることになってしまうのである。

ボナパルチズムを階級的基礎との関連なしに超歴史化する誤り

第二に、何故このようなことが問題とされねばならないのか、ボナパルティズムを超歴史的な概念とすることがあやまりなのかについては、それがブルジョア統治態の一種であるかぎり、その政治的階級的ブルジョア民主革命とそこでの大土地所有制の解体をつうじ土地を与えられた分割地農民＝小農制土地所有においているからである。

このことを解することは極めて重要である。『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』↓『資本論』でのマルクスの規定に従うならば、小農的農業とは資本主義的農業経営と、封建的土地所有の過渡の存在として、基本的には農産物の圧倒的な部分がその生産者たる農民たちの直接的生活手段として消費され、商品化する自給自足的構造を基礎とした、資本主義的商品経済とは直接のかかわりを持たない農業形態である。

この小農民的農業、分割地農民が自由な小土地所有を守り、農業生産を持続するためにプロレタリアートの階級的登場と、その物質的生産手段との無結合、労働力商品としての存在に敵対し、保守化し、まさに資本家的商品経済の発展と敵対することをプロレタリアートに対する敵対として表現するとともに、ボナパルティズム権力は本来的にはブルジョア統治態の一種でありながら、社会の進歩に反動化する政策を暴力的、専制的に採用することによって均衡的権力として自己を表現したのである。

このようなブルジョア独裁の反動的形態は、特に産業資本主義段階におけるレイ・ボナパルトの一八五一／七〇年の第二帝政、同時期のドイツのビスマルク・レーニンに言わせればクレンスキー政権などもその性格を有していることになる。

がいずれにしても、階級的均衡の「例外国家」として、ブルジョア政治専制としてのボナパルティズムは考察されるべきものなのだ。

ただこのことそれは、資本家的商品経済の発展の一過程として、商人資本主義の末期から主要には産業資本主義期に成立したのである。

それに対しファシズムは、一九二〇／四〇年代の帝国主義段階において、帝国主義ブルジョアがプロレタリアートの階級的高揚に対し、小ブルインテリ、小商品生産者、手工業者、農民などの社会的不安と自己権力運動を利用することにより絶対的な専制形態であり、「金融資本のもっとも反動的な、もっとも排外主義的な、もっとも帝国主義的な分子の赤裸々なテロリズム独裁」（ディミトロフの反ファシズム統一戦線についての規定）として、テロルと社会的デマゴギーの流布をつうじつつ、議会制度とブルジョア民主主義をかなぐりすててなされた最も反革命的なブルジョア統治形態である。

大切なことはこのどちらもが、資本家的商品経済の分析から原理的に証し明かされる社会科学的概念なのではなく、どちらもが歴史的に登場した政治過程上の特殊な権力形態であり、あくまでも現実的＝歴史的に対象化されるべき性格を有したものであるということである。

しかるに西田は、この過去の歴史的事実との関連において具体的に対象化されるカテゴリーを、何がしら資本主義支配に固有の政治傾向一般として論じているのであり、超歴史化しているだけでなく、笑止千万なことには「ボナパルティズムへの過渡形態である」などとトンチンカンなことを言っているのであり、全くデタラメ極まるのである。

歴史的に対象化するならば、階級的基礎との関係でも、現在では侵略反革命体制の構築にむけた帝国主義段階におけるファッショ的再編こそが問題とされるべきであり、もはやそれを権力中枢そのものとして論じえることはできない。

第四に、現在の帝国主義天皇制攻撃との関連でとらえてみても、次のようなことが言える。

すなわち、明治政体において成立した権力、明治憲法下の権力形態においては六〇年代以来の被抑圧階級、プロレタリアートの階級的攻勢により、議会をつうじての支配に危機感を持った帝国主義ブルジョアによる、天皇をつかっての官僚的、軍隊的、警察的権力支配への転成策動としてみることができる。

ということは、まさにこの侵略反革命体制の全面的構築にむけている、様々な帝国主義ブルジョアの攻撃（第一には議会制民主主義を空洞化させつつ、執行権力を自立化させ、行政権力の肥大化をはかることによって、又第二には徹底した反共、反革命イデオロギー攻撃を全社会の帝国主義的再編と一体化させつつおこない、在日朝鮮人、沖縄人、部落民などへの差別観念をうえつけることにより、「内なる排外主義」をつくりだすことによって、第三には治安弾圧体制を構造化させ、官僚的、警察的、軍隊的権力と自立的な人民抑圧体制を構造化させることによって、暴力的な人民抑圧体制の実体から現在の帝国主義天皇制攻撃をとそ、暴露していく必要があるのであり、「天皇制ボナパルティズム」論のように、今となっては直接に権力の実体を形成するものとはいえないのをもち出すことによって、帝国主義の攻撃の性格をあいまい化させることは正しくないのである。

つまり「ボナパルティズム」を言うからには、その権力の実体を明確化させる必要があるのであり、現在の場合、天皇訪米や皇太子の訪沖、女性週刊誌記事などをうけつつ金融資本へのブロックによる侵略反革命体制づくりをいそぐ帝国主義ブルジョアの、新たな国民統合策動の一環として位置づけなければならないのである。

しかるに「ボナパルティズム」にあっては、この内容を不明確にするのであり、「天皇制ボナパ攻撃」などという場合には、天皇への権力集中策動であるかのように映ずるのであって、全く正しくないのである。西田にあっては、この「天皇への問題ぬきにボナパルティズムを言っているのであるから、何をか言わんやである。

一体西田は、こういった問題をどれほど、考察しぬいたのであろうか。

つまり、⑧明治政体における天皇制支配の構造上の連関の解明なくしては、事実、ボナパルティズムやファシズムを歴史的な事実、実際上の政治過程への切開としてみるのでもなく、又⑨現在の帝国主義ブルジョアの天皇をつかっての攻撃、まさに帝国主義天皇制攻撃の性格を明らかにするのでもないまま、ただいたずらに中核派のマネ、ひょう窃、模倣としてだけ、無概念規定な政治用語を乱用するというのは、全くもって許しがたい暴挙であり、政治的妥協であり、痛苦な戦旗派建設の歴史にかけても決して許すことはできないのである。

カトキスタ論などより、「ボナパ転換論」のデタラメと謗り得ぬ、全くもって歴明になったと考える。

全国の同志、友人、兄弟達！

われわれは七〇年春以来のブント内分派闘争の歴史と、四年にわたる戦旗派建設の伝統にかけて、恥かしげもなく中核派の用語をサル真似し、無総括にブントの党派性を売りわたし、ひょう窃につぐひょう窃を重ね、盗用だけで理論作業にかえる、かかるメンシュヴィキ以下的なサークル的中間主義者を、われわれ自身の断固たる皇太子訪沖、天皇訪米絶対阻止闘争への総力決起をつうじ、この秋の過程において断固として止揚、解体していかなければならない。

天皇ヒロヒトをつかっての、日帝ブルジョア支配の共同の、許すべからざるアジア侵略反革命戦争体制構築を決して認めず、無実無罪の石川一雄氏の不屈の敢闘精神に学び、ヴェトナム、カンボジア、韓国民衆の不抜の戦闘性、基合性にとことん学びとることによって、何としても、絶対に、まさにわれわれ一人ひとりの全身全霊をかけたアジア人民への血債の償いの闘いとして、今秋期十月天皇訪米を打破し、粉砕しようではないか。

全労、全人民、全軍は打って一丸となり、団結をかため、総力で帝国主義天皇制攻撃に抗し、足立グループの階級的堕落をふみつぶしつつ、前進につぐ前進をかちとろう！

帝国主義天皇制攻撃に抗し、十月天皇訪米絶対阻止の大水路をきりひらこう！

安保ー日「韓」体制を打倒し、韓国民衆、ヴェトナム、カンボジア人民の総決起に応えよ！

沖縄海洋博、皇太子の訪沖を許さず、日帝独占資本による沖縄の反革命統合策動を粉砕せよ！

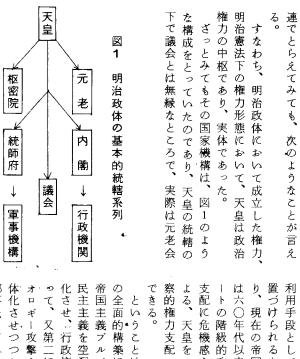

図1　明治政体の基本的統轄系列

化している訳ではなく、笑止千万なことには「ボナパルティズムへの過渡形態である」などとトンチンカンなことを言っているのであり、全くデタラメ極まるのである。

歴史的に対象化するならば、階級的基礎との関係でも、現在では侵略反革命体制の構築にむけた帝国主義段階におけるファッショ的再編こそが問題とされるべきであり、もはやそれを権力中枢そのものとして論じえることはできない。

第四に、現在の帝国主義天皇制攻撃との関連でとらえてみても、次のようなことが言える。

すなわち、明治政体において成立した権力、明治憲法下の権力形態においては六〇年代以来の被抑圧階級、プロレタリアートの階級的攻勢により、議会をつうじての支配に危機感を持った帝国主義ブルジョアによる、天皇をつかっての官僚的、軍隊的、警察的権力支配への転成策動としてみることができる。

ということは、まさにこの侵略反革命体制の全面的構築にむけている、様々な帝国主義ブルジョアの攻撃（第一には議会制民主主義を空洞化させつつ、執行権力を自立化させ、行政権力の肥大化をはかることによって、又第二には徹底した反共、反革命イデオロギー攻撃を全社会の帝国主義的再編と一体化させつつおこない、在日朝鮮人、沖縄人、部落民などへの差別観念をうえつけることにより、「内なる排外主義」をつくりだすことによって、第三には治安弾圧体制を構造化させ、官僚的、警察的、軍隊的権力と自立的な人民抑圧体制を構造化させることによって、暴力的な人民抑圧体制の実体から現在の帝国主義天皇制攻撃をとそ、暴露していく必要があるのであり、「天皇制ボナパルティズム」論のように、今となっては直接に権力の実体を形成するものとはいえないのをもち出すことによって、帝国主義の攻撃の性格をあいまい化させることは正しくないのである。

つまり「ボナパルティズム」を言うからには、その権力の実体を明確化させる必要があるのであり、現在の場合、天皇訪米や皇太子の訪沖、女性週刊誌記事などをうけつつ金融資本へのブロックによる侵略反革命体制づくりをいそぐ帝国主義ブルジョアの、新たな国民統合策動の一環として位置づけなければならないのである。

しかるに「ボナパルティズム」にあっては、この内容を不明確にするのであり、「天皇制ボナパ攻撃」などという場合には、天皇への権力集中策動であるかのように映ずるのであって、全く正しくないのである。西田にあっては、この「天皇への問題ぬきにボナパルティズムを言っているのであるから、何をか言わんやである。

一体西田は、こういった問題をどれほど、考察しぬいたのであろうか。

つまり、⑧明治政体における天皇制支配の構造上の連関の解明なくしては、事実、ボナパルティズムやファシズムを歴史的な事実、実際上の政治過程への切開としてみるのでもなく、又⑨現在の帝国主義ブルジョアの天皇をつかっての攻撃、まさに帝国主義天皇制攻撃の性格を明らかにするのでもないまま、ただいたずらに中核派のマネ、ひょう窃、模倣としてだけ、無概念規定な政治用語を乱用するというのは、全くもって許しがたい暴挙であり、政治的妥協であり、痛苦な戦旗派建設の歴史にかけても決して許すことはできないのである。

カトキスタ論などより、「ボナパ転換論」のデタラメと謗り得ぬ、全くもって歴明になったと考える。

全国の同志、友人、兄弟達！

われわれは七〇年春以来のブント内分派闘争の歴史と、四年にわたる戦旗派建設の伝統にかけて、恥かしげもなく中核派の用語をサル真似し、無総括にブントの党派性を売りわたし、ひょう窃につぐひょう窃を重ね、盗用だけで理論作業にかえる、かかるメンシュヴィキ以下的なサークル的中間主義者を、われわれ自身の断固たる皇太子訪沖、天皇訪米絶対阻止闘争への総力決起をつうじ、この秋の過程において断固として止揚、解体していかなければならない。

天皇ヒロヒトをつかっての、日帝ブルジョア支配の共同の、許すべからざるアジア侵略反革命戦争体制構築を決して認めず、無実無罪の石川一雄氏の不屈の敢闘精神に学び、ヴェトナム、カンボジア、韓国民衆の不抜の戦闘性、基合性にとことん学びとることによって、何としても、絶対に、まさにわれわれ一人ひとりの全身全霊をかけたアジア人民への血債の償いの闘いとして、今秋期十月天皇訪米を打破し、粉砕しようではないか。

全労、全人民、全軍は打って一丸となり、団結をかため、総力で帝国主義天皇制攻撃に抗し、足立グループの階級的堕落をふみつぶしつつ、前進につぐ前進をかちとろう！

帝国主義天皇制攻撃に抗し、十月天皇訪米絶対阻止の大水路をきりひらこう！

安保ー日「韓」体制を打倒し、韓国民衆、ヴェトナム、カンボジア人民の総決起に応えよ！

沖縄海洋博、皇太子の訪沖を許さず、日帝独占資本による沖縄の反革命統合策動を粉砕せよ！